

三訂
帝國讀本
卷二

375.9
Ha7
資料室

41584

教科書文庫

4

810

41-1922

2000
54272

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



大正十一年一月二十三日
文部省檢定濟

文學博士芳賀矢一編

三訂帝國讀本

東京

資合會社
富山房發行



三訂帝國讀本卷二目次

一	聖德太子.....	一
二	秋の夜.....	七
三	鱒釣.....	九
四	朝鮮雜觀其の一.....	一七
五	朝鮮雜觀其の二.....	三三
六	八道の山.....	三〇
七	加藤清正と熊本城.....	三三
八	歌話.....	三六
九	克己.....	四四

目次

一〇	藤樹先生	四七
一一	赤城山の大沼	五三
一二	山語	五九
一三	冬の田園二題	六四
一四	大石良雄其の一	六六
一五	大石良雄其の二	七三
一六	死して惜しまるゝ人たれ	八〇
一七	新年	八七
一八	伊勢神宮	九一
一九	國を祝ふ歌	九四
二〇	日本の國號	九六
二一	類似せる東西の諺	一〇三

二二	倫敦便	一〇五
二三	セシル・ローツ	一一一
二四	大阪	一二七
二五	洒落と機智	一三三
二六	伊能忠敬の晩學	一三五
二七	機械と道具と人間の手	一三三
二八	眞の勇氣	一四一
二九	極地の探檢其の一	一四五
三〇	極地の探檢其の二	一四九
三一	北國の初春	一五九
三二	太陽と春	一六一
三三	雨後	一六五

三四 閉塞隊の出發に臨みて別を兄に告ぐ……………一七〇

三五 皇室と國民……………一七〇

自修文

一 最も偉大なる豪傑……………一

二 東海道と山陽道……………六

三 兎狩……………二二

四 休暇日記……………二五

五 日記の七徳……………二八

六 蜘蛛の糸……………二九

卷二目次終

三訂帝國讀本 卷二

一 聖德太子

萩野由之

成文法

政治家としては、新に大陸文明を輸入して大化改
 新の基を作り、宗教家としては、佛教を奨励して各宗
 から太子様と尊ばれ、法律家としては、成文法の始と
 いはれる十七條の憲法を制定し、而して又工藝家か
 らは其の技術の開祖の如く尊敬せられ、あらゆる方
 面に其の道々の元祖の如く仰がれるのは、厩戸皇子

(一)用明天皇の長
 子。推古天皇
 の二十九
 年(二八二)
 薨。年
 四十九

(一)第三十一代。
(二)第三十三代。
輔佐す

非凡な天資

である。
皇子は用明天皇の御子で、推古天皇の御時に皇太子として攝政をなされ、天皇を輔佐し奉つて、政治上、宗教上、工藝上、文學上、種々偉大な功績を残されたお方であるが、御幼少の時から非凡な天資は顯れていさせられた。皇子御幼年の時、或日父の皇子即ち後の用明天皇は、王妃と共に皇子を伴なうて、宮中の御庭に今を盛と咲いてゐる桃の花を御覽なされたことがあつた。其の時、父君は御子の智慧を試して見ようと思し召されて、

「そなたは此の桃の花の紅を美しいと思ひますか、

又は此の松の葉の緑を美しいと思ひますか。」
とお尋ねになつた。すると皇子は、



聖徳太子七歳時の像
（置安寺の木の像）

「桃の花は美しいごぎいませうが、夫は只一時の事です。松の緑は四季に色が變りませんから、私は此の

桃の花よりは、あの松の色を愛します。」

と即座にお答へ遊ばされたから、さすがの父君も大

即座に

一 聖徳太子

障碍

故障を排す

いに驚いて、一層御寵愛遊ばされた。此のお答は、幼年の御方としては珍しいお考であるが、成長の後に諸の政治上の改革に就いては、いろいろの障碍も起つたであらうに、いつもそれに打勝つて事を成遂げられた其の勇氣と志操とは、此の松の緑の四季に其の色が變らず、霜や雪の故障を排して常磐木の操を立てるのと相似てゐるでは無いか。桃の花の様に、一時にはつと美しう派手な事をして、末の遂げぬ時には、大改革も大事業も成功するものでは無い。桃と松の答は、吾人の好い教訓である。又或時皇子は他の諸皇子と一緒に、お庭先で遊ん

平身低頭

でいらせられたが、何かの事の間違から、激しく口論に及んで、大分騒々しくなつた。これを聞かせられた父君は、懲しめの爲にとあつて、鞭を取つて御縁先までお出でになつた。すると他の方々は、皆鞭にうたれるのが恐ろしさに、我先にと逃げ隠れられたが、只此の皇子だけは、少しも逃げ隠れられぬのみか、父君の御前に出て、平身低頭していらせられた。そこで父君は怪しみながら、「そなたはなぜ逃げぬのか。」とお尋ねになると、皇子は恭しく一禮して、「逃げました所で、天へも昇られず、地の中へもはい

られませぬ。それよりは正直にお鞭を受けたいと
思ひまして、こゝに居るのでございます。」
と申し上げられたので、父君は却つて皇子の正直を
お褒めになつたといふことである。

此の正直の心がけが、四季變らぬ松の緑のやうに、
皇子一生の本領となつて、いつも御事蹟にあらはれ
てゐる。それ故、皇子のお定めになつた十七條の憲法
の中にも、正直といふこと、平和といふことなどが重
に諭されてある。平和は正直から起るので、正直はま
た成功の基であるからである。

皇子の御事業は種々の方面に光彩を放つてゐる

本領

光彩を放つ

が、かゝる大人物の幼時には、かくの如き事があつた
のである。大人物となるには、幼少からの修養が最も
大切である。

— 讀史の趣味 —

二 秋の夜

幸田露伴

月の夜は秋こそ勝れたれ。春の月の光はめでたき
ことは誠にめでたし。懐かしきことも誠に懐かし。さ
れどなほ聊か物足らぬ心地す。冬の月は清さは餘り
ありて、味無きに近し。夏の夜の月の團々と大いなる
が、海原の果より、松の樹の間より、又は市中の薨の浪
間より出でたる、目ざましく、夜色も快くをかしけれ

薨の浪間

天地の靈氣

ど、たゞ我が魂の世に浮るゝをこそ覺ゆれ、天地の靈氣の身に浸入るやうなるを覺ゆることなし。

かすけく囁

秋は夜面白く、夜は月面白し。仲の秋の五日六日の月の、いつか夕暮の空に出て居りて、雑木の梢、もろこしの垂葉などに、風かすけく囁く、まづ面白し。遠山黒く暮れて、月は光を増し、庭樹のそれ〴〵、潤葉、纖葉の葉表の照、葉蔭の闇、おのがじし畫趣を爲し、詩情を作りて、合して爽涼清澄の景を醸し出す様、いづくにもありふれたる事ながら好し。夜更け蟲吟じて、世の中靜かなる夜、たま〴〵燈前に書をさしおきて、起ちて廊を歩む折から、窓の白きを看て、戸を推開きて出づ

おのがじし畫趣を爲す

月天心を過

光華六合にわたる

ならでは

れば、月は天心を過ぎて、光華六合にわたり、霜に澄める夜の氣は、水將に凍らんとするが如くなる、心身頓に此の世のものならずなりたるやうに覺えて、秋ならでは、夜ならでは、月ならではと思はる。

三 鱒 釣

徳 富 蘆 花

もはや三時過でもあらうか、日は西に廻つて、海上に白金の柱が横たはつた。良い時候だ。陸の方から北風が冷り〴〵海面を撫でて、舟底を敲く程の漣を立て、居る。鱗形の雲が青空の上に銀の波をうたせ、海は其の影を浮べて、漾々と搖いで居る。富士、江の島、

漾々

足柄、箱根、眞鶴ヶ岬から伊豆の天城山は、西日の光にくつきりと際立ち、左手を見ると近くて葉山、遠く三崎、三浦半島は縦に短く走つて、天城と三崎の中間には、伊豆の大島がほのかに見える。白帆が其處此處に五つ六つ。大島の方角に、ペン尖(ペン)でうつた(ペン)の如く、一(Kana)の如く小さいのは、鯉を釣る舟であらう。つい一町ばかり離れて、針魚(ササリ)を釣る舟もゐる。いづどこから湧出したか、笹の一葉に黒蟻二つ載せた様なものが見える。やはり舟だ。黒蟻と見たのは水夫二人で、せつせと漕いで居るのだ。

秋だ。秋だ。實に秋だ。つい背後の逗子の山々も、心か

Pen.
Period.
Dash.

(一) 逗子海岸にある不動堂。



らか、少し鳶色になつたやうだ。不動様の邊に頻に百舌鳥の鳴くのが聞える。葉山から逗子の停車場に通ふがた馬車の喇叭の音が聞える。

一羽下りて、時々水に潜つては、鯢(ウナギ)を啜(く)へて出て、人間は不需用なものだ。と、さも嘲り顔に、此方を向いて胸を突出して、ゆらく、波に浮いて居る。

さうかうする内に、笹の一葉と見えた舟は、次第に

近く漕いで来て、吾々の舟から三四十間離れて、碇を下して釣り始めた。針魚を釣つて居た舟も一艘其の側に寄つて来た。吾々も碇を上げて、舟を其の方角に移した。

釣瓶落

釣瓶落といふ秋の日は、箱根の駒ヶ嶽の上に落掛つて、富士の頭ははや紫に染つて来た。風はすつかり風いで、落日の影はゆらくと水の上に金を流して居る。百舌鳥も鳴きやんで、陸の方に啞々と鳥の聲が聞え始めた。實に静かな秋の夕だ。空高く海渺々として、風なく、波なく、夕日の光が獨り此の間に充ち満ちて居る。

渺々

潑刺

忽ち「からん」我々の一人が糸をかけて置いた針金の鈴が一つ鳴つたかと思ふと、「からん〜りん〜」と二つ三つ四つ續けざまに鳴つた。来たな。繰上げる糸の末を見ると、果して鶯茶の背に、銀色の腹をした、眼の大きな、口の透通つた五寸位のやつが、潑刺と上つて来た。と見るうちに、今度は自分の指先にかけた糸がびくりしめた。糸を手繰ると、重い。大きいぞ。それ上つた。まる鱒だ。一尺はたつぷりあらう。さあ釣れ出した。三艘の舟三の字に並んで、餌をつける、投げ込む、手繰る。いはゆる膚撓せず、目逃せず、枚を銜むといふ格で、はや蔭深く成行く水の上に伸びかゝつて、繰下

枚を銜む

し、引きあげる。隣の舟でどぶんと鉛錘を放り込む音。此方の舟で手繰る糸の舷側に軋る音。釣上げられた魚のばたばた舟板の上に跳ねては、生簀の水にとび込む音。

「いや、此奴ア大きい。ちよ、ちよ、ちよつと、其のた、攔網を。」と一人が遽しく叫ぶ。

掬ひ上げて見ると、何だ、目張の大きいのだ。

「とうく、か、つたな。」ともう一人が胴の間で獨語するのを顧ると、黒鯛を釣上げて居る。黒鯛先生、先刻までは餌を繞つて、敢へてくはなかつたが、終に夕蔭になつて、眼が眩んだと見える。

破れた沈黙は又もとに復つて、又暫く釣つて居ると、大方葉山の寺で撞出したのであらう、暮の鐘が一つぼーんと海面に響いて來た。

「どうです、もうしまひませうかね。」と一人が空を仰いだ。

「さうですな。」と飽足らぬ溜息一つ。眼を上げると、いつの間にか日は入つて、富士から相豆の連山は、入日のあとの卵色の空に、印度藍の波をうねらして、まだはつきりと輪郭を見せて居るが、つい其處の葉山、逗子の山々は、已に夕靄がかゝつた。手を洗ふ潮水はさながら温湯だ。併し海氣は冷えて來たので、我々は古

Indigo.

優長

も見える。人毎に長い煙管を携へて居るのは、仙人にはふさはしからぬやうに思はれるが、此の長い煙管其のものが、優長といふ感を一層強からしめるのである。

殊勝

貴賤上下悉く純白な着物を纏うて、見渡す限り眞白なのは、全世界中恐らくは朝鮮ばかりであらう。夏だからさうなのでは無く、冬でもやはり同じである。これには一つの傳説があつて、昔或時代の王様が、父王の死を悲しんで、始終白い服をつけて居られたので、人民が皆之に倣つたのだといふ。一應聞けば尤もらしい殊勝な話であるが、此の傳説は無論作り事である。

萬事萬端

崇拜

あらうと思ふ。何處の國でも、古い時代には眞白な着物が流行るが、其の中に色々の染色や、縞や、飛白の衣裳が行はれる。文化の他の方面が種々に變化を受けたにも拘らず、純白な衣服が數千年の後までも行はれて居るのは、實に不思議といはねばならぬ。萬事萬端支那を崇拜した國として、此の國俗を變へなかつたことも、考へれば面白い事である。

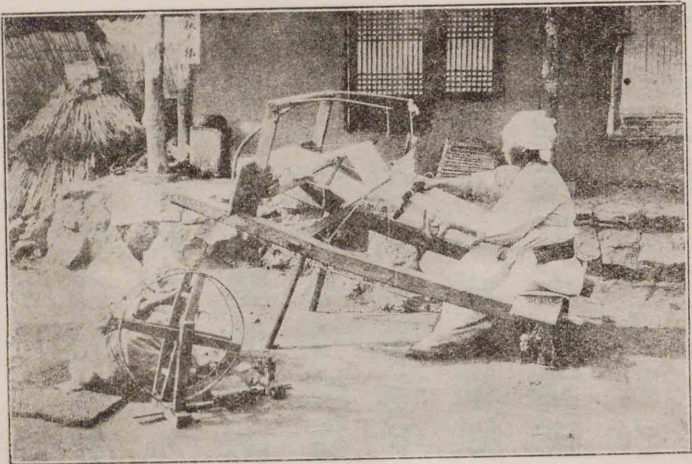
子供は折々桃色や、萌黄色や、藍色の着物を着て居る。それも全部同じ色で、日本の娘の子の様に、美しい花紅葉の染模様では無い。婦人も間々紅色、萌黄色の衣を着けて居るが、模様や縞は少しも無い。殊に婦人

繪卷物

が「長衣」といつて、我がかつぎの様なものを着て、目ばかり出し歩いて居るのは、日本の古代の風俗其の儘で、服制に多少の相違こそあれ、大體に於て古い繪卷物を見る様な心地がする。低い屋根の下で眞桑瓜などを食つて居る様子は、何處と無く今昔物語をまのあたりに見る様である。現在の生活に於て、朝鮮人が優長といふばかりでは無く、朝鮮の歴史其のものが優長で、今でもやはりそろくくと、昔の歴史が流れて行くのでは無いかと思はれる。

衣冠を正しくす

衣冠を正しくすることは、慥かに朝鮮人の一美風であるかとも思ふ。どんな卑賤な人でも、滅多に肌を



朝鮮風俗

露すことは無い。之は寒い氣候の關係から、自然習慣となつた所以もあるかも知れぬが、とにかく素肌を人前には出さない。支那の労働者も身體の上部こそ露せ、腰から下は出さないが、朝鮮人で肌を脱いで居るのは、終に一人も見なかつた。

朝鮮人は雨具を用ひぬといふ事は豫て聞いて居つた。今は田舎でも蝙蝠傘を

雲水

手にして歩いて居る人を見受ける。それよりも不思議に感じたのは、雨降の時に、冠の上に小さな傘を載せて居る事である。竹の骨に油紙を張つたものである。成程日本の傘は之を大きくしたものだ。なと感服した。又頭に雲水の被る様な深笠の大きいのを被つて歩いて居るのが往々ある。あれは何かと聞けば、喪中の人で、喪中は一年、二年、三年必ず常にあの笠を着けて居るといふ。如何さま舊い禮儀はやかましい處だ。朝鮮、支那、土耳其、皆それ〴〵の冠物を今にも保存して居る。日本人は古い物を保存して居るが、新しい物は又何でも用ひる。洋服に下駄も履き、紋附の羽織

如何さま

Silk-hat.

にシルクハットも被る。

五 朝鮮雜觀 其の二

朝鮮人の物を運ぶのは、男は背で、女は頭である。男の背には例の支繫ちけいといふものを掛けて、一切の物をそれで運ぶ。八百屋が唐茄子や胡瓜を賣るのにも、背に負うて來るので、日本の様に、天秤棒で両端に擔ぐことは無い。すべてが山に柴刈に行く昔話の爺さん式である。女は洗濯物でも何でも頭に載せて行くので、これは京都の大原女式である。併し大原女の様には、張板や、梯子などを擔いで歩くのは、見受けなかつた。

朝鮮には虎が居る。竹に虎といふから、竹も澤山ありさうに思はれるが、竹は少い。これは氣候のせいである。竹の簾や、扇子や、竹細工もいくらもあるが、概して日本の様に竹を種々の工業には使つて居らぬ。南の新領土臺灣は竹の名所で、唐竹眞二つ割で天秤棒の代りにしたり、竹で船を作つたりして居るが、京城では竹竿一つ見附からぬ。洗濯物を干してあるのを見ると、大抵繩にかけ渡してある。又田舎などでは、丘の上にひろげて並べてあるだけである。桶、盥の様なものにも、竹の籠たがは無ない。竹の無い所へ行くと、今更のやうに竹の効用の廣いのに驚かれる。

今更のやうに

水道栓の側で水を酌んで居る朝鮮人を見ると、皆ブリキの石油の空函を用ひて居る。如何にも貧乏げにあはれに見える。瓢箪をたち割つたものが水を酌む杓子であるのは、古風で面白い。

朝鮮人の履物は、男も女も一種の靴であつて、日本のやうな下駄、足駄は見當らぬ。靴の下に足駄の齒のついたものはあるが、鼻緒を立て、其の鼻緒を足の指に挟んで歩くといふ藝當は、日本人より外には出来ぬのであらう。

朝鮮の家は如何にも低くて、むさくるしく見える。京城にはさすがに瓦葺の家も見えるが、田舎は殆ど

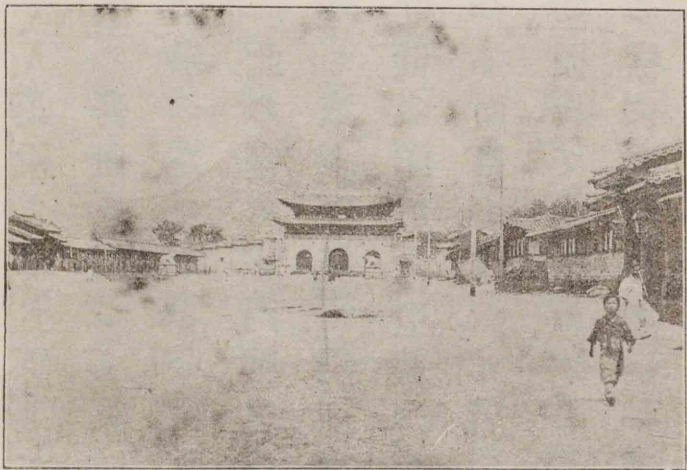
藝當

むさくるし

庶民

藁屋ばかり。其の藁の葺方が、日本の如く綺麗に端を
 そいで無い爲、唯藁を打ちかけたやうに、如何にも汚
 く見えて、遠くから見れば、豚小屋の様にしか見えぬ。
 寒さを恐れるため窓が尠いから陰氣で、日本の田舎
 家の様にからりとして居らぬ。日本のは小さくても、
 汚くても、からりとおつ開いて居る。あれでは夏はさ
 ぞ暑からうといへば、日が透らぬから割合に涼しい
 とのこと。床は土で、其の下が温突あたたかで、冬は火を焚いて
 暖めるのである。元來朝鮮では、庶民には二階建、三階
 建を禁じたのである。それ故庶民の家は皆低い。地に
 這つて居る様である。又家を餘り立派にすれば、金持

(一)朝鮮李太王生
稱父李是應の尊



景福宮興化門前

と認められて、すぐに課税せられるから、金持でもわ
 ざと外觀を汚くして居た
 やうな原因もあらう。併合
 後新築する朝鮮人の家に
 は、段々と二階造の高いの
 も出来るさうである。
 それに比べれば、王宮は
 比較にならぬ程規模も大
 きいし、立派である。就中さ
 きの王宮景福宮は大院君
 の造營せられた宮殿で、幾多の宮殿樓閣が相連つて、

膏血を絞る

廣いものである。これを造る爲には、民の疾苦をも顧
ず、人頭税までも課して作り上げたといふ。いはゆる
民の膏血を絞つて築いたので、此の宮殿が即ち李朝
に崇つたのだといはれて居る。

丹碧を塗る
[Sofa]

此の宮の正門興化門前の通などは、幅六十間、東京
にも滅多に無い。現王宮昌德宮も拜觀したが、これは
近世の洋風に塗替へ、西洋の椅子、ソ^ソーファなどがあ
つて、面目が改つて居る。併し總じて建築には丹碧を
塗附けてあるばかりで、材木の削り方、仕上方は日本
の様に立派で無い。一體樹木の少い京城に、昌德宮の
裏の秘苑だけは、さすがに老樹が生ひ茂つて居るが、

林泉の美

何等林泉の美とては無い。小さい溪流の石に題した
句に、「飛泉三百尺。疑自九天來。」とあるのには驚いた。

乃至は

朝鮮人は怠惰で労働を嫌ふといふが、農業に精を
出して働いて居るのを見ても、決して懶るばかりの
人間では無い。朝鮮の山を禿山にしたのも、朝鮮の家
屋を豚小屋の様にしたのも、乃至は長煙管をくはへ
て悠然として南山を見て居る白衣の民を作つたの
も、皆古來の悪政の罪である。

〔苛政猛於
虎。〕〔禮記〕

苛政は眞に虎よりも猛である。憫むべき我が一千
萬の新同胞は、今や仙人の生活を次第に離れて、嬉々
として我が聖天子の德澤に霑ひつゝあるのである。

(一)朝鮮八道。

益荒雄

夕間暮

知遇

(二)支那をいふ。

異境の山

六 八道の山

大町 桂月

(一) 八道の山よ、いざさらば、年の七年戈執りて、
 踏荒したる日の本の 益荒雄は今歸るなり。
 釜山の浦の秋ふけて、 空も時雨の夕間暮、
 波路遙かに帆を揚げて、 汝と今や別るなり。
 知遇の恩に身を捨て、 四百四州を我が駒の
 蹄に蹴んと勇みしも、 覺めて儂き夢なれや。
 我を知りにし太閤の 世になき後は誰が爲に、
 千里の外に戈執りて、 異境の山に軍せん。
 耻をしのびて故郷に、 歸るも後に死なん爲。
 主君の家の行末を、 思へば重き命なり。

(一)石田三成。秀吉の臣。慶長五年(一六二六)○(二)小西行長。秀吉の臣。三成に黨し敗れて殺さる。

あはれ太閤世を去りて、よつぎの主は幼し。
 石田、小西の小人ばら、かならず事を誤らん。
 我が幼時より育まれ、 恵に浴みし豊臣の
 家を護りて死なん身の、 永くは住まじ世の中に。
 跡に見捨つる益荒雄の 亡魂若しも知るあらば、
 三途の川や六道の 辻に暫く我を待て。
 これを限りの見納に、 今一度と見返れば、
 波音すぐく雨荒れて、 野山は霧に朧なり。
 八道の山よ、いざさらば、 國の譽とたゝかひて、
 花と散りにし日の本の 男子の骨を護れよや。

—黄菊白菊—

(一) 豊臣秀吉の臣。慶長十六年(一七二七)に歿す。

(二) 西郷隆盛の亂。

(三) 標悍比なし守將陸軍少將谷干城。

七 加藤清正と熊本城 大類 伸

熊本城は彼の勇猛無比の武將として知られた加藤清正の築いた天下の名城である。凡そ城郭といふもの、いづれも堅牢堅固でないものは無いが、熊本城の如きは、特に其の著しいものである。さればこそ封建時代の遺物でありながら、尙能く明治十年の役に標悍比なき薩摩隼人の軍を引受けて、籠城の目的を達し得たのである。

熊本城は丘陵の一角に築かれたもので、坪井川及び白川の流を天然の濠として居る。随つて城濠の見るべきものは少いが、其の高い屈折を極めた石垣は

確かに一偉観で、彼の名古屋城の天守閣の築造者として名高い清正が築いたに背かず、さすがに堂々たるものである。

城内の通路の複雑な事、屈折をなして居る事も、やはり防備に注意した結果である。併し天守閣を始め、數多の櫓や多聞長屋の建築等は、極めて質素に出来てゐる。名古屋城は五層の大天守閣が全部白堊で、壯麗なる美觀を發揮して居る上に、燦として尾陽の空に輝く金鯱によつて、益、其の名を天下に謳はれて居るが、熊本城の建築は之に反して、極めて見すばらしい。其の建物は黒い板張の建築で、本邦城郭の特色と

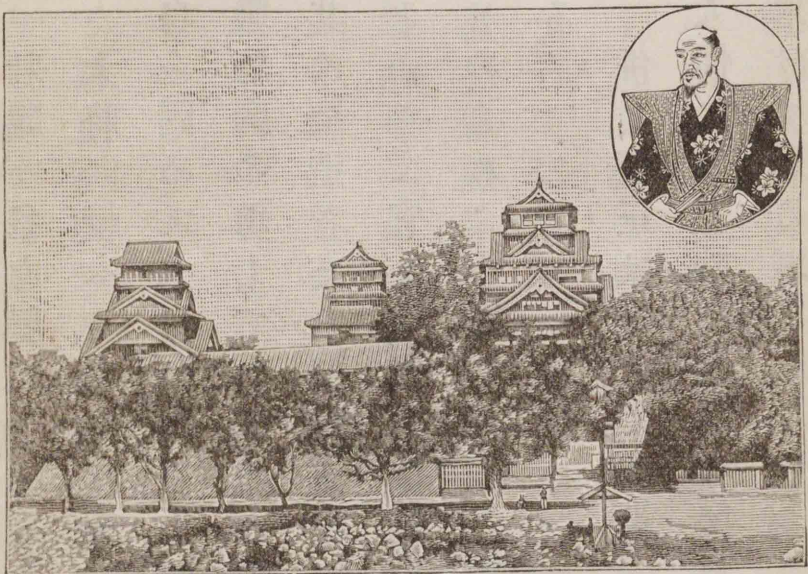
美觀を發揮す

もいふべき白壁造ではない。又其の屋根の工合なども、住宅建築に似たもので、城郭の壯麗を誇るべき外観は備へて居ない。

さはれ

さはれ城郭の價値は實用であつて、外観では無い。壯麗なる威容も結構ではあるが、實戦に役に立たなくては何にもならぬ。熊本城は質素である。恰も風采の汚い野武士のやうな趣がある。併し實用の點は十分に注意が届いて居て、外観は粗末でも、銃眼其他側防、俯射の設備に缺けた點は無い。たゞ惜しいことは天守閣の建物が焚けてしまつたため、今ではたゞ其の石垣が残つて居るに過ぎないことである。熊本

野武士



熊本城と加藤清正

城の建築が黒い板張であるのは、敵の目標となるのを避けるためと思はれる。岡山城の天守も板張で黒いところから、昔からこれを「烏城」と稱して居るが、熊本城の如きは、岡山城よりも更に烏城であるといつても宜しい。

百戰練磨

彷彿せしむ

壯麗な名古屋城を、緋緘の鎧着て床几に腰をかけた大將に較べるならば、熊本城は即ち黒皮緘の鎧に身を固めて、大身の鎗を小脇に、馬を陣頭に進めた百戰練磨の勇士である。此の點に於て、熊本城は慥かに其の築造者たる加藤清正の倂を彷彿せしめるものといつて宜しい。質素儉約、しかも武備は一日も忽にせぬ。これこそ實に清正と熊本城と一致する點である。

民政

併し清正は決して武勇一遍の大將ではなかつた。人情に厚く、殊に領内の民政には一方ならぬ功績を擧げて居る。城の濠となつて居る坪井川や、其の他肥

灌溉の便

一再でない

後の四大川といはれて居る球磨川、緑川、白川、菊池川に大工事を施して、水運を便利にして船の通路を開き、又灌溉の便を計つて、新しく田地を開いたことが一再ではなかつた。而して此等の大工事は、後世に非常な恩惠を残したもので、肥後平野の開墾は、實に朝鮮八道に鬼上官の名を謠はれた猛將清正に負ふ所が多いのである。又熊本城は別名を銀杏城とも呼ばれて居るが、これは清正の植ゑた銀杏樹が本丸に在るからである。

清正が試みた河流の護岸工事は堅固を極めたもので、後年大洪水で其の石垣が崩れたとき、更に其の

面目

下に一重の石垣があることを發見した。萬一の際を慮つて、二重に石垣を築いてあつたのである。これによつても、用意周到な清正の面目を察することが出來よう。

馳驅す

熊本城が質素にして實用に缺けた點の無い事も、やはり清正の事業としてふさはしいことと頷かれる。俗謠に「敵に勝たう(加藤)の城の主」と謠はれた清正は、戰場に馳驅する以外に、尙上の如き眞面目を發揮したのであつた。

八歌話

中村秋香

(一)松平定信。奥州白河の城主。文政十二年(一八三〇)年(二四八九)年(七十九)の今九段上近衛聯隊の所。

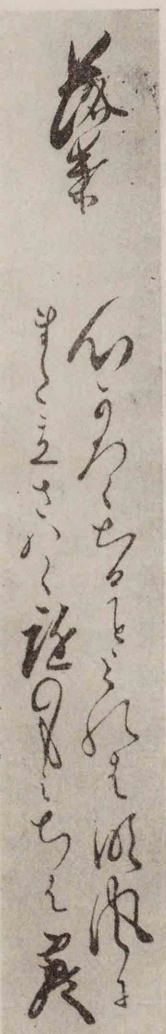
類焼

心落葉
るかろく
ば吹くと
また立ち
みわぐ庭
ぢぐばの
定信

落首

一 とりる坂

(一) 白河樂翁公、年十二にて猶田安の邸におはせし頃、麻布鳥居坂なる戸川内膳の邸宅より火起り、其の邊の町家類焼しけり。大火といふにもあらざりしかど、



白河樂翁筆蹟

燒死せしもの多かりしかば、

この火事は人の命をとりる坂

これより上のとがはないぜん

と落首せる者ありけり。近侍の人々興じ笑ひて、いか

すまふ

にもよく詠みたり」と評し合ひけるを、君聞き給ひて、「余が詠まんには、さはいはじ」とありければ、奥醫師の某、さらば何とか詠ませたまふ」と問ひまゐらするに、「言はじ、言はじ」とすまひ給ふを、強ひて問ひまゐらせたりしかば、「四の句を『怪我の事なり』といふべきなり」とあり。

顛倒す

一句のことにて、一首の意味を全く顛倒せしめ、過の已み難きに出づるを明らかにせられしこと、誠に「梅檀の二葉」とぞ謂ふべき。

二 あがたの宿

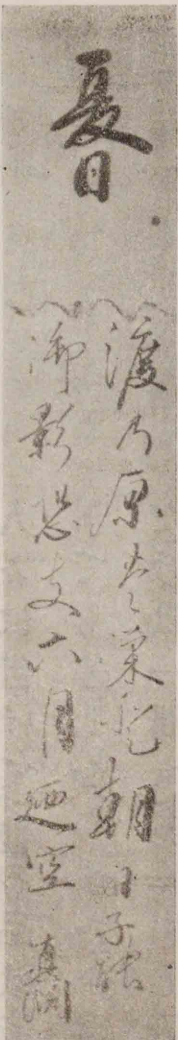
(一) 櫻町天皇の御代。

延享某の年の秋、江戸大風雨にて、市中處々の人家

狼藉

破損しけるあけの日、賀茂眞淵翁の許に、門人某見まひに行きけるに、翁の家も夜來の風にて、屋根大方吹きまくられ、日光席にさし入り、屋根板狼藉たる中に、翁は平常に異なるさまもなく、机に凭りて沈思吟咏

夏日
わたの原と
よさかのほ
る朝子のこ
る影かしのこ
御影の空
き六月の風
淵



賀茂眞淵筆蹟

會釋

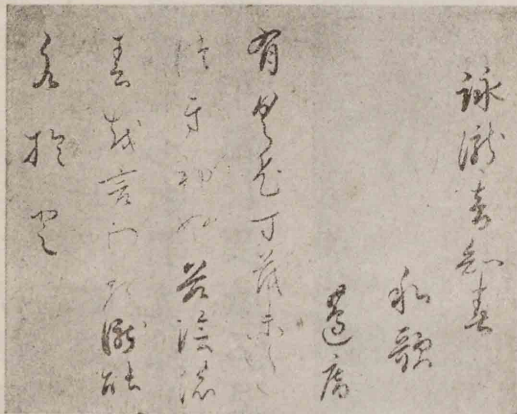
せり。烈しき風雨にも候ひしかな。といふ聲を聞き、始めて某の來れるを知りけん、顧て會釋しつゝ、餘談に及ばず、此の嵐にて一首出で來ぬ」とて、書きて示しける歌、

野分してあがたの宿はあれにけり
つき見に来よと誰にいほまし。

三 燒野の原

天明の火災にて、小澤蘆庵が家危くなりしとき、翁

人々に告げて、他の品は皆焼
きても苦しからず。たゞ書籍
だけは一冊も多く出し給は
れ。とて、自身も年來の鈔録本
を風呂敷包にし、之を負ひて
太秦(三)なるしるべの家(三)に避け
ぬ。此の火にて内裏の炎上せ



小澤蘆庵筆蹟

(一)光格天皇の御代。火災は天明八年(二四四八)。
(二)歌人。京都に住む。享和元年(二四六一)歿。年七十九。
詠澤 善知春 蘆和歌
うぐひすも まだつけそ
めぬ谷かけ の春をこと
おとる瀧の水

(三)山城國葛野郡。京都市の西郊。

未明

し由を聞き、いたく歎きて、翌日未明に太秦を出で、内裏の燒跡を拜し奉りて、

今朝見れば燒野の原となりにけり

これや昨日の玉しきの庭。

—新説歌がたり—

克己

如何なる事業にもせよ、稍大いなる事業は、其の事業に當る人、よく自己の私慾私情に打克ちて、始めて之を成就することを得るものなり。克己の工夫なくして、大いなる事業の成就せられたる例は甚だ少し。

九 克己

幸田露伴

自然の數

又如何なる人の事蹟を見ても、其の人にして稍大いなる人ならば、其の人は必ず克己の工夫に富みたる人なり。即ち克己の工夫を爲さずして、大いなる人となり得し人は殆ど無しといふも可なり。蓋し自己に克つ能はざる微力薄弱の人、如何でか能く萬人に勝るゝことを得ん。これ自然の數といふべきのみ。

又人若し自己に克つことを能くせば、其の人は即ち成功の段階に一步を上せし人といふべきなり。蓋し自己に克つは極めて難事たるは勿論なれど、一度自己に克ち得たる時は、其の克つことの難きだけ、其の克ち得たることの愉快の大なるを感ずるものな

常人

處辨す

り。人一度此の克己の愉快を感じて其の味を知る時は、常人が見て以て非常の困苦なりとなす所の事をも、悦んで處辨し、常人が見て以て其の勞苦堪へ難しとなす事をも、楽しんでなすことを得べし。

例へば一日十里の路を行くは、常人の能くする所なり。十一里の路を行くは、其の差僅かに一里にして、其の一里を朝稍早く出でて歩まんには歩み得べきなれども、曉の眠の心地好きまゝ、夙く起出で難きは常人の情なり。今此の情に打克ちて十一里歩みたりとせば、他の人々は既に我が一里の後にあるなり。我が情に克ちたる當時の凜然と緊張せし氣分、又今衆

緊張す

人に先んじて一里進み得たる眼前の結果、いづれか愉快ならざらん。此の愉快を味はひ得たる時は、其の人は翌日の同じ場合に於て、自己に克つ事の、昨日に比して甚だ容易なるを感ずべく、随つて又常人に比して一里多く歩む事を敢へてするに至るべし。是の如くなれば、次の日の夕には、其の人常人に先だつこと二里となるべし。若し右の如き場合を重ねんには、常人と其の人との距離非常に多くなりて、遂に常人の如何にすとも及ぶべからざるに至るならん。

卓絶
天稟

こゝに説きたる例は、やがて常人と卓絶したる人との距離の生ずる所以なり。元來天稟の資質の厚薄

先天

によりて、人の勢力の差あることは争ひ難き事實なれども、先天の差によりて、凡人と非凡人との距離の生ずるよりは、各人の心掛の差によりて、甲者と乙者との間の距離の生ずること、實際の世間に於て甚だ多きを見る。即ち克己の工夫を用ひて事に勤むる人と、己に克つの工夫を毫末も敢へてせざる人との差は、日に日に漸く増大して、終には一方の人は非凡となり、一方の人は平凡に終るに至るなり。

(一) 儒者。名は原と稱す。慶安元年(一六五〇)八月。歿。年四十。

一〇 藤樹先生

橘 南 谿

(一) 中江藤樹先生は俗稱を與右衛門といひ、江州大溝

(一)高島郡。今青柳村に屬す。
(二)明の大儒。
其の風を望む

(三)京都の學者。元祿四年(二三五)歿。年七十三。



中江藤樹

在なる小川村の百姓の家に生れき。學王陽明の流を汲みて、其の德行一世に秀で、遠近皆其の風を望まざるはなかりきといふ。

(三)熊澤蕃山は先生の門人なり。此の人の先生に従ひし始を尋ぬるに、面白き話あり。

其の頃加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて京へ上るに、江州河

原市より馬を雇ひて、榎木の宿に至りて泊りぬ。馬方河原市に歸りて、馬を洗はんと鞍を解きつれば、財布一つ出でたり。取上げて見れば、金二百兩あり。大いに

(四)高島郡。
(五)滋賀郡。

蘇る

面持

驚き、急ぎ榎木に行きて、かの飛脚の宿れる家に到り、對面して委しく尋ね問ふに、其の人の忘れし物に相違無ければ、之を返しけり。飛脚は死したる者の蘇りたる心地して、行李より別の金子十五兩を取出して馬方に與へ、もし此の二百兩なくば、我が一命を失ふのみならず、親兄弟までも重き罪に行はれん。されば此の恩をかゝ言葉のいひ盡すべきにあらず。まづ當座の御禮までに之を贈り奉る。と、涙を流して喜ぶ。馬方大いに驚ける面持にて、そなたの金をそなたに取納め給ふに、何の禮いふことかあるべき。とて、手にだに取らず。

こしらへい
ふ

理を盡し詞
を盡す

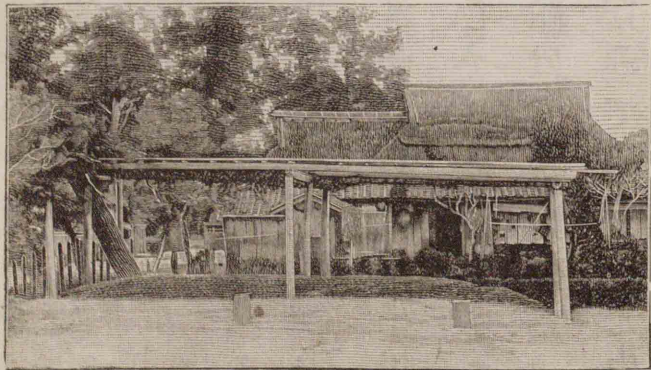
色々にかしらへいへども、更に受けずして歸らんとする故、止むことを得ず、十兩となし、五兩となし、三兩となし、段々減じて、遂には金二歩となし、せめてこればかりは」と、理を盡し、詞を盡していふに、「此の金を受くる程ならば、二百兩をも留め置くべし。それだにかく返し申すからには、聊かにも謝禮を受くるは我が心にあらねど、餘りに餘儀なく宣へば、さらば鳥目二百文を賜へ。これは今夜休むべき所を、こゝまで追掛け來れる賃錢なり。我が取るべき錢なれば申し請くべし。」といひて、二百文を懐にし、歸らんとす。

氏素性

飛脚は感に堪へかねて、其の氏素性を尋ね問ふに、

無理非道

「名ある者にあらず。又何一つ知れる者にもあらず。我が里の近くに、小川村といふ所あり。そこに與右衛門といふ人おはして、夜毎に講釋といふ事をせらる。某もをりふし往きて聞き申したるに、親には孝を盡すべし、主人は大切にすべきものなり、人の物は取らぬものなり、無理非道は行ふべからずなどいふこと、常に語り給ふに、より、今日の金子も我が物にあらざれば、取るべき理



宅邸の其と藤の愛遺樹藤江中

辛き命

なしと心得しまでのことなり。」と言捨て、歸りぬ。
飛脚はそれより京へ上りて、いつもの宿に到り、さ
ても此の度は辛き命生延びて、各方にも對面するこ
とを得たりとて、ありし次第を委しく語りけり。

隨從

蕃山をりふし田舎よりのぼり居て、學問修業の最
中なりしが、此の物語を聞きて、其の人こそ眞の儒と
いふものなれとて、翌日すぐに江州に行きて、小川村
に藤樹先生を尋ねて、隨從を願ひたるに、人に教へ申
す程の學徳なし。」とて、更に許し給はず。蕃山ひたすら
に願ひて、二日が間先生の門に佇みて歸らず。先生の
老母これを氣の毒がり、ともかくも内に入れ申せよ。

師弟の契約

とあるに、辭み難くて内に入れ、遂に師弟の契約をせ
られけりとぞ。

(一) 岡山の城主池田光政。

格別のこと

其の後、先生を備前侯の招き給へる時、其の身は病
身なりとて固く辭し、門人熊澤といふものあり。お役
にも立つべきものなり。」とて、蕃山を出されけり。いづ
れも格別のことなり。

— 東遊記による —

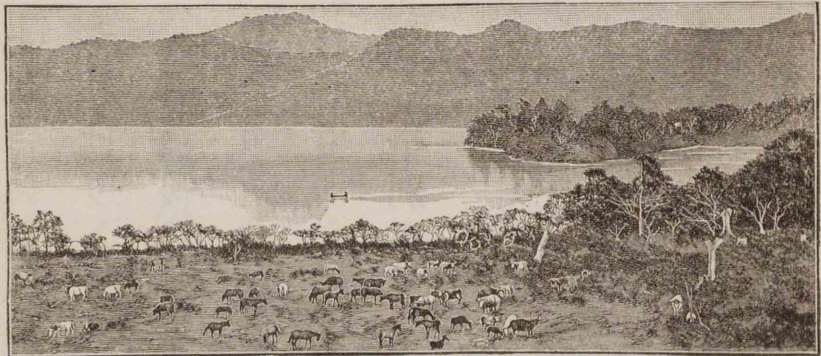
(二) 上野國利根勢多二郡に跨る。榛名、妙義と合はせて上野の三山と稱せらる。

一 赤城山の大沼

吉江孤雁

赤城山上一泓の明鏡、寂然として四圍の樹影を映
して居る森嚴な大沼の水。

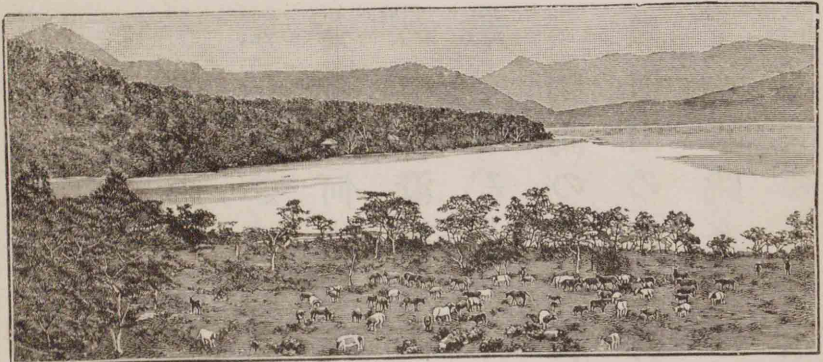
夜が明けはなれると、夜中の霧は沼の面を這つて



赤城山大沼

林を傳ひ、山上へ逃上つて行く。窓を開けて見ると、山影が水に沈んで、水は深碧。沼の西方にや、高く見えるのが五輪峠で、續いて右手に高く聳えてゐるのが大沼を廻る外輪山中の最高峰黒檜山である。

朝風が靜かに吹いて來ると、白い靄が大方晴渡つて、五輪峠の裾が沼近く迫る處、檜の林があつて、青草が沼の縁に沿うて、美しく敷



の放牧

かれてゐる。見ると其の檜林の中から、二三頭の牛が水邊まで出て來る。仔牛も其の後から現れて來て、水邊を狂ひ廻る。

「もー」と聲高く一頭の牛が吼え、ると、また何處かでもーと應ずる。それを相圖にか、幾十の牛が續々水邊へ集つて來て、頭を垂れ尾を振つて青草を噛んでゐるが、やがて其の中の一頭が、戯に狂ひはじめると、すべての牛が忽ち狂奔し

出して、みんな散りぐいになつて、林の中に影を没してしまふ。

牛の影が見えなくなつてしまふと、後は何處からか「ひんから、ひんから」と鳴く鳥の聲が朗かに聞えて来る。如何にも爽かて、玉を轉ばす様な響が、朝の空氣の中に澄渡る。鶉つぐみの一種とかで、此處の人は赤腹と呼んでゐる。

朝靄の幄

朝靄の幄が既に引上げられると、旭の光が第一に黒檜山の頂を射る。如何にも爽かな空氣が胸に沁みて、心も跳り出す。山の家を出て、草原を通つて水邊に行く。家の人は、水邊へ行つても餘り大きな聲を出す

(一)上野國群馬郡

なと注意する。何故かときくと、牛飼が牛を呼集める時に大きな聲を上げるので、牛は聲を聞附けると、皆集つて来るからであるといふ。如何にも興味多い事では無いか。三輪村(一)から時々登つて来る牛飼は、牛に鹽を與へようと、大きな皿に鹽を入れて、廣い草原へ出ては、「おーい」と聲を揚げる。山々の牛は其の聲を聞いて、林の中、藪の蔭、叢の中から、我先にと走り出し、牛飼の周圍を取巻いて、大きな鼻を其の身體に擦附けながら、口を開いて、舌の上に其の鹽を擦込まれるのを待つのである。あゝ可憐な動物。彼等は常に飼主を慕つて、どんな遠い所に居ても、其の聲を聞くと駆出

清冽

して來て、鼻を鳴らし、身を擦附けて、容易に其の身邊を離れないといふ事である。

水邊まで出て見る。水は清冽、底の砂までも見える。岸づたひに林の中を、倒れた枯木などを飛越えて、島の方へ出て見る。水は深碧を湛へて、如何にも深さうに見える。島は樅の樹、檜の林、其の他の雜木が鬱蒼と茂つて、蔓草が縦横に蔓つてゐる。不意に一羽の鳥が、其の林の茂みから飛出して、沼を横切つて向ふの岸へ飛んで行つた。飽くまで靜寂な景色である。

— 旅路 —

一二 山 語

五十嵐 力

上野と信濃との國ざかひ、荒船山の裾を東南に走り下つた谷間、そこに私は生れました。

(一)上野國北甘樂郡。

岩戸村といつて、今でこそ千に近い人家がありませんが、此の物語のあつたといふ五百年も前には、幹に

白苔の生えた老樹の松や杉が谷を蔽うて、其の暗い陰の裡に、梟が凄い音に鳴くといふ淋しい處であつたでせう。其の頃此の村に住む百姓に、名を利太と呼ぶ男がありました。至つて素直な、木訥一遍の人間でありました。或日山へ行つて一日働いて、ちやうど夕日が荒船の峯をかすめて、猿の聲の遠く聞える時

木訥

夕日峯をかすむ

とぼく

分に、山刀を腰にして、唯一人とぼくと家路を辿つて來ました。

部落

彼の家は、谷川を隔て、向ふの山際に三四軒並んでゐる部落の真中の家であつたのです。彼は何氣なしに、いつもの通り土橋を渡つて、家の門まで來ましたが、其處で圖らず異様な物の音に驚かされました。それは今まで聞いたことのない、非常に微妙な音樂の音でありました。

異様

微妙

好奇

もつれた氣分

利太は此の音が耳にはいるとひとしく、全く聽きほれてしまひました。さうして、恐れる心と、好奇の情と、慕ひ寄る心のもつれた氣分で、我知らず引返して、

いら／＼した氣持

恍惚

夜一夜

其のものの音の出處をつき止めようと致しました。併し、其の音が何處から來るのか、どうしてもはつきりしなかつたので、彼は段々いら／＼した氣持になり、終には全く恐ろしさを忘れて、野山の間を何處ともなく駈廻りました。不思議な樂の音に恍惚として、藪も森も目に入らず、狐狼の叫聲も耳にはいらなくなつたのであります。

それから、彼は夜一夜野山をさ迷うて、とう／＼家に歸りませんでした。其の夜は冴えた月が、荒れた野山を物すさまじく照して居たさうです。其の中を彼は不思議な樂の音に浮れて、影法師の様にふら／＼

と歩いて居たのです。併し、此の樂の音は、少しも外の人には聞えなかつたさうです。朝になつて、彼は自然と目が覺めました。目の覺めた時に、高い山の突出た岩の上に、氣の抜けた様に立つてゐる自分を見出しました。

誰彼なしに

此の事があつてから間もなく、村人等は夕方になると、誰彼なしに、同じ樂の音に浮れ出すやうになりました。併し、此の樂の音は、幸にして人間の體に少しも障らなかつたさうです。此の不思議なことは、其の後久しく續きましたが、幾年かたつて後、或夜利太の浮れて躍つた山の岩が、谷川を越して、向側に飛びま

因む

した。其の時から此の微妙な音樂が、誰の耳にも聞えなくなつたといひます。

私の村の名はもと此の岩の飛んだ事に因んで、岩飛村と書いたさうです。さうして、後に字がむづかしくて書きにくいといふ理由から、いつの間にか岩戸と書くやうになつたのださうです。

純朴
粗野

私は此の美しい傳説をもつた村に生れたことを、非常に嬉しく思ひます。又純朴な粗野な利太にも、尙微妙な樂の音を懐かしむ優しい心のあつた事を喜びます。

— 趣味の傳説 —

一三 冬の田園二題

一 霜

島崎藤村

毎年十月の二十日といへば初霜を見る。雑木林や平坦な耕地の多い武藏野へ来る冬、淺々とした感じの好い都會の霜、さういふものを見慣れて居る人に、此の山の上の霜を見せたい。桑畠へ三度か四度も霜が来る。桑の葉は忽ち縮み上つて焼ける。實際猛烈な冬の威力を示すものは、あの霜だ。そこへ行くと、雪の方はまだしも感じが柔い。降積る雪は寧ろ平和な感じを抱かせる。

十月末のある朝のことであつた。私は家の裏口へ

茫然

出て、深い秋雨に色づいた柿の葉が、面白いやうに地にふるのを見た。肉の厚い柿の葉は、霜に焼け損はれたり、縮れたりほしないが、朝日があたつて来て霜のゆるむ頃には、重さに堪へないで、脆く落ちる。暫く私はそこに立つて、茫然と眺めて居た位だ。そして、其の朝は殊に烈しい霜の來たことを思つた。

—千曲川のスケッチ—

二 木 枯

長 塚 節

烈しい西風が、目に見えぬ大きな塊をごろつと打付けては、又ごろつと打付けて、皆瘦せこけた落葉木の林を一日苛め通した。木の枝は時々ひゆうくと

悲痛な響を立て、泣いた。短い冬の日はもう落ちかけて、黄色な光を放射しつゝ、目たゝいた。さうして西風は、どうかするとぼつたり止んでしまつたかと思ふ程静かになつた。泥をちぎつて投げたやうな雲が、不規則に林の上にとつとひつついて居て、空はまだ騒がしいことを示して居る。それでゐて時々は思ひ出したやうに、木の枝がざわ／＼と鳴る。世間が俄に心細くなつた。

— 土 —

(一) 播磨國赤穂郡。城主は淺野内匠頭長矩。
(二) 元祿十四年三月十四日長矩

一四 大石良雄 其の一 山路 愛山
赤穂の城下は早馬の爲に大騒となりぬ。江戸城中

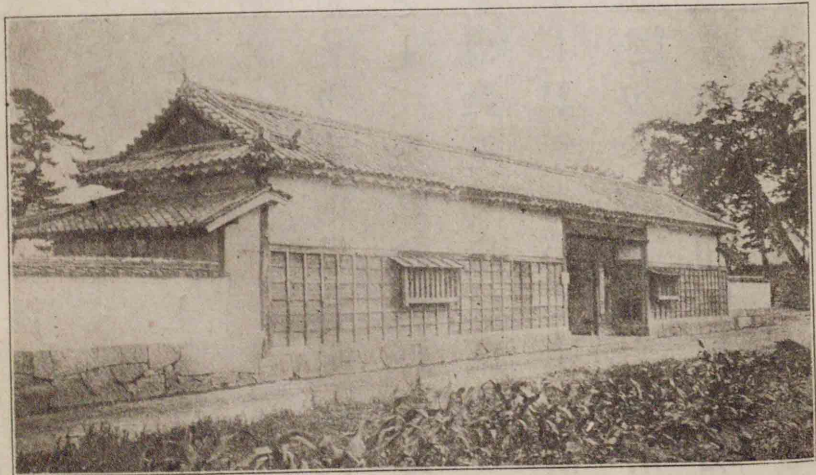
吉良義央を江戸城中に傷つ

國老

自盡

危機

刃傷の報藩邸に達するや、早水藤左衛門、茅野三平は直ちに馬に跨りて日に行くこと三十里、五日にして赤穂に達し、變を國老大石良雄に報じたるなり。長矩自盡の命下るや、原惣右衛門、大石瀨左衛門は更に同じ早さを以て赤穂に達したり。君家事あり、衆情恟々、危機は始めて英傑を呼出



赤穂大石良雄舊邸

門閥

器局

光を韜む

せり。門閥に於て國中たぐふ者なく、而も温厚にして庸愚なるが如き大石良雄は、こゝに始めて彼の器局を知られたり。晝行燈の綽名を蒙りて、久しく光を韜める彼は、衆人に驚異せられぬ。

隱然

赤穂城中の會議は開かれたり。事情は愈明白になりぬ。大野黨の一團は隱然として分れぬ。大野九郎兵衛は良雄と同じく赤穂の家老にして、班は良雄の下に在りしが、長矩に寵用せられ、且年老いて事に慣れたりしかば、勢力は却つて大なりき。彼は専ら幕府の命に恭順すべきを唱へて、成るべく温和に城を明渡さんことを主張せり。然れども血氣に逸る藩士等は、

恭順

血氣に逸る

城を枕にす

彼を以て卑怯なり、不忠なりとし、上使を引受け、城を枕にして潔く討死すべしと唱へ出せり。良雄は言へり、まづ主君の弟大學頭長廣君をして、主君の後を嗣がしめんことを幕府に請ふべしと。

左袒す

(一)今の垣市。城主戸田采女正は長矩母方の従弟。

(二)元祿十四年。

越えて二日、城中の會議は復開かれたり。良雄は前説を繰返せり。大野は異議を述べたり。人々は多く良雄の説に左袒せり。大垣侯戸田采女正は、大學頭を立てんと請ふことの、却つて幕府の怒を招くに過ぎざるべきを報ぜり。逃亡は始れり。四月十三日大野は遂に遁逃せり。人は滅せり。籠城は遂に行ふべからずなれり。

難に投ず

老人は殉死の議を唱へ、青年は復讐の論を主張せり。良雄は復讐の説を執れり。復讐の説は勝てり。血判に與る者百十餘人、其中江戸より來つて難に投ずる者僅かに十八人。

血沸く

道路は清潔にせられたり。人民は警められたり。四月十八日赤穂城の上より、受城使の來るは望まれたり。藩士の血は沸けり。良雄は極力彼等をして靜肅ならしめたり。城中より城外へ使者は往返せり。翌日城は難無く明渡されたり。何事かあるべしと待設けたる世人は、赤穂藩士の餘りに温和なるに驚きたり。

待設く

(一)山城國宇治郡。
優游自適

良雄は京都の山科(一)に住して優游自適せり。田園を

天下の視聽

(一)羽前國米澤侯。吉良家の親戚。
偵察

采邑

(二)長矩自及の日。

買ひ、居宅を營みて永住を粧へり。彼はかくの如くして身を四通八達の地に置き、天下の視聽を集め、自ら晦まして上杉氏の謀者を欺けるなり。謀者は雙方より出されたり。上杉氏は良雄を京都に偵察せしめ、良雄は吉良氏を江戸に偵察せしめたり。上杉氏は吉良氏を保護することに努め、人を遣はして吉良氏の邸を守らしめ、且其の采邑の人に非ざれば婢僕に用ふること無からしめき。是を以て吉良氏の事情を探るは極めて難かりき。

年は暮れぬ。記憶すべき三月十五日は再び來りぬ。赤穂の華岳寺は市民の手向くる香火に煙りぬ。良雄

花謝し鶯老(一)京都
破廉耻
恬として關り知らず

(二)通稱忠左衛門。一黨の古老にして、其の戸に在る同志の統領たり
一縷の望
義氣金鐵の如し

は在京の同志を集めて、先君の忌祭を修めぬ。かくて花は謝し、鶯は老いて、四條河原の夕涼に都の群衆雜沓する頃となりぬ。腰拔、賣國、破廉耻の誹謗は愈、良雄の頭を壓せり。而も彼は恬として關り知らざるもの如し。

忽ち飛報あり、江戸の吉田兼亮(二)より來る。曰ふ、七月十八日長廣藝州に預けられたり。と。一縷の望は絶えぬ。此の時まで義氣金鐵の如く見えし同盟は、弛み始めたり。眞に復讐の志なく、長廣に因りて君家の或は再興せられんことを希望せる人々は、漸く血判を悔い始めたり。或者は久しく音信を絶ち、或者は遁逃せ

外舅

り。良雄は盟書を同志に還して、亦復讐の念なきを示せり。同志の過半は憤激せり。良雄は是に於て彼等に其の眞意を語れり。而して最も堅固なる最後の同盟は成れり。此の年十月に至つて、良雄は妻と二人の幼兒とを外舅石束氏に託し、獨り長子良金を携へて江戸に向ひぬ。

一五 大石良雄 其の二

吉良氏の防衛は猶密なりき。彼は其の本所の邸を以て卑濕なりとし、之を修補するまで、麻布(一)なる上杉氏の別邸に住へり。これ彼が刺客を避くる計なりき。

(一)江戸本所松阪町。
(二)江戸麻布我善邸の一部。

餘命おぼつ
かなし

一死を賭す

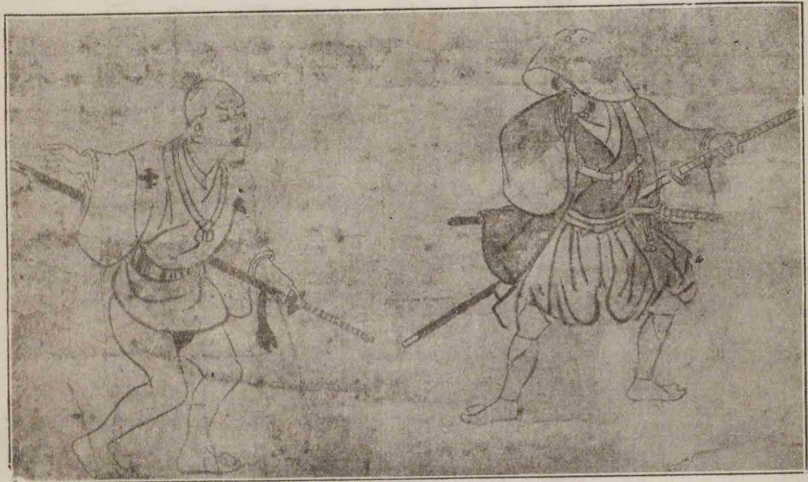
同盟は復讐に急げり。殊に老いたる人々は餘命のおぼつかなきを以て、早く事を済まさんと欲せり。或者は寧ろ白晝公然、吉良氏を襲うて一死を賭せんと欲せり。而も良雄は聽かざりき。

良雄父子は直ちに江戸に入ること敢へてせざりき。彼はまづ池上(一)の平間村にありて、吉良氏の動靜を覗ひ、十一月五日に至つて、漸く江戸に入れり。父子は變名して垣見五郎兵衛、同佐内と名乗りぬ。年少なる良金は始めて江戸を見たりしなり。

十二月に至つて、吉良氏の邸は成れり。而して夜々怪しげなる青年は之を窺へり。彼等は何處より來り、

(一)今は神奈川県橋樹郡御幸村に屬し、下平間に上平間の二字に分る。
動靜

(一)通稱勘平。



大石良雄筆蹟(赤穂去に臨み書き來て從僕に與へしもの)

何處へ去るを知らず。五更に至つて、他の一隊と交代せり。さすがの吉良氏も之に氣付かざりき。しかも間諜、探偵すべて効を奏せず、秘密は却つて吉良家に入する茶道より、同盟の一人横川宗利に漏れたり。義央の邸に歸るべき日は明らかになりぬ。復讐の日は即ち定まりぬ。

(一)長矩の室の實家、備後國三次城主

十二月十三日に至つて、良雄は卒然淺野長澄の邸に至りて、長矩の後室瑤泉院夫人に謁し、主家の預り金を會計して其の餘剩を還せり。しかも彼の一事は猶秘して語らざりき。蓋し夫人は夙に賢を以て藩士に欽仰せらる。去年の變、大學頭長廣は老中の命を受け、取る物も取敢へず、走り還つて夫人に告げたり。夫人は少しも驚かず、徐に問へり、仇人は誰にして、其の死生は如何と。長廣は義央の死生を知らざりき。夫人は曰へり、更に登城して後、再びわれを訪はれよ。兄死して、弟たる者仇の存亡を知らざることやはあると。かくて夫人は終身長廣に會はざりき。

欽仰す

やはある

罪々

寂寥を破る
鬪諍叫喚

鹵簿

喧嘈

翌十四日の朝、良雄は泉岳寺に至りて長矩の墓に謁し、三百金を寺僧に寄せて去れり。此の夕、雪霏々たり。同盟者は漸く集れり。火事装束せる四十七個の人物は、三隊に分れて吉良邸の三面を圍めり。笛聲は雪夜の寂寥を破れり。鬪諍叫喚の聲は聞えたり。既にして再び笛は鳴れり。火事装束せる四十七個の人物は吉良邸を出去れり。夜景は初の寂寥に返れり。

雪霽れて、夜も亦明けたり。例の如く十五日を祝すべき登城の諸侯と武士とは、城をさして鹵簿を急げり。忽ち聞く、路人の喧嘈なるを始めて知りぬ、赤穂の

飛語紛々

浪士が吉良氏の邸を襲うて義央の首を獲たるを。風説は區々たり、飛語は紛々たり。曰く、吉良氏を襲ひしものは獨り四十七人に止らず、此の外猶黒装束を爲せる百二三十人ありて、吉良氏の門外を圍みたり。曰く、上杉氏の兵は四十七人を追撃せり。曰く、淺野氏と上杉氏と相鬪はんとすと。

(一)通稱助右衛門。但馬國出石の城主久尙。

官裁

良雄は吉田兼亮、富森正因を大目付(一)仙石伯耆守の第に遣りて事實を報ぜしめ、同志相率ゐて泉岳寺に至り、義央の首を長矩の墓に供し、祭文を讀みて其の志を告げ、靜かに官裁を待てり。寺は三斗の酒を置き、て壯士を勞へり。人あり曰ふ、上杉氏の衆至る」と。良雄

は同志を警めて防禦の備を爲せり。而して上杉氏の衆は終に來らざりき。

此の日良雄等は仙石氏の第に招かれ、細川(熊本)、久松(松山)、毛利(長府)、水野(岡崎)の四家に預けられたり。良雄は他の十六人と共に細川氏に、良金は他の九人と共に久松氏に。

元祿十六年二月四日、四十六人は死を賜はれり。細川綱利は良雄等に訣別の盃を賜へり。良雄は他の十六人と共に、幕府の檢使の前に自裁せり。良雄は外温藉にして、内に枉ぐべからざる意志を有したりき。彼は何事も打靜めて、騒がしきことを嫌

自裁す
温藉

長者たる品
位
失墜す

主一

(Stoics)

職として…
に由る

ひたりき。彼は如何なる場合にも、長者たる品位を失墜せざりき。然れども、彼は徒に平和を愛するものに非ず。なすべき事は必ずなし遂げ得べき主一と堅忍とを有したりき。彼はストア學者の表面と戰國武士の裏面とを有したりき。彼は愛すべくして狎るべからず、畏るべくして嫌ふべからざる人なりき。彼が同盟の首領として成功せし所以のもの、職として此の品性ありしに由れり。

—愛山文集—

一六 死して惜しまるゝ人たれ

嘉納治五郎

有爲
舉國の悼惜

呱呱の聲

自營自活

鴻恩

生れて而して長じ、長じて而して死す。禽獸かくの如く、草木かくの如く、人間亦かくの如し。されば人として、禽獸草木と異ならんと欲せば、生れがひある人たらんことを要す。予は更に前途有爲の諸子に向つて、死して舉國の悼惜を受くる人たらん事を望む。

人生れて呱呱の聲を發するより、長じて一個の成人となり、自營自活して世に立つに至るまで、他より受くる所の恩徳一ならず。之を近くして、まづ父母の鴻恩あり。我等の生るゝや、自營の道を知らず、自活の道を知らず。たゞ泣くことを知り、笑ふことを知るのみ。此の間、晝夜を問はず、寒暑を論ぜず、心身の疲勞を

黑白を辨す

事理

保全

至尊

忘れ、千辛萬苦以て我等を保育し、以て我が生長を遂げしむるものは、豈我等の父母にあらずや。之に次ぐに師長の恩あり。我等が纔かに黑白を辨ずる頃より、長じて社會に出づるに至るまで、我に誨ふるに事理を以てし、我に説くに道德を以てし、必要なる學術上の知識を授け、身體保全の法を講ぜしめ、我をして將來世間に獨立する基礎を成さしむるものは、我が師長にあらずや。

更に又至尊及び國家に受くる恩あり。至尊は仁慈なる大御心を以て臣民を愛撫し、洪大なる聖徳を以て國家を統治し給ひ、國家各種の機關は生民の安寧

福祉
不逞

亂離塗炭の
苦

區々

を維持し、其の福祉を増進し、兇惡を正し、不逞を罰し、以て我が父母師長をして我等に對する慈愛薰陶の務を完うせしめ、又我等をして危難を憂へずして安全なる發育を遂ぐるを得しむ。若し此の事無からんか、生民はこゝに亂離塗炭の苦みに陥るならん。

されば我等の安全なる發育を遂げて一個の成人となるは、實に此等數者の恩あるに由るなり。然らば則ち我等が成人の後に於て此等數者に酬ゆるは、人間當然の義務にあらずや。

然れども人間の生涯は實に區々たり。或は其の修養の時期に當りて、懶惰遊蕩の間に貴重なる光陰を

醉生夢死
蠹賊

送り、體軀徒に長じて、方に自營自活以て我が生育の恩に報ゆべき時に至るも、無爲無能、其の父母の恩に報ゆること能はず、其の師長の恩に酬ゆること能はざるものあり。況や國家が生を成す所以に對ふることをや。朝に起きて而して食ひ、夕に食うて而して眠る。かくの如くにして老い、かくの如くにして死す。これ所謂醉生夢死する者にして、實に國家の蠹賊、人間の最下なるものなり。

裨益

又其の無能かくまで甚だしきに至らず、何等か一種の事に従ひ、國家に對して多少の裨益をなし、以て自活の道を求め、僅かに父母を養ひ、自ら衣食して一

流風遺韻

生を送る者は、之を前の醉生夢死する者に比すれば勝ること萬々なりと雖も、かくの如きは僅かに自ら受くる所の恩に酬ゆるに過ぎずして、其の一生の經營事業の永く後世に徳し、其の流風遺韻の遠く子孫を動かすに足るものなし。かくの如きは我等の理想とすべき所にあらず。

天賦の能力

我等は人間天賦の能力を善養し、利用し、其の畢生の事業は、以て我等が父母、師長、國家、社會に負ふ所の鴻恩に酬い得て、更に餘裕の綽々たるものあり、後世子孫をして、永く其の餘澤を受けしめ、國家をして我等を得て一段の進歩をなしたる事とこしなへに

餘裕綽々

闔國

追憶せしめん事を期すべし。我等が前途有爲の少壯諸子に待つ所のものは、實に之に外ならず。生きて一郷の爲に功ある者は、死して一郷の爲に惜しまれ、生きて一郡の爲に盡せる者は、死して一郡の爲に哀しまる。若しそれ其の事業國家の進歩を助成し、其の忠誠よく闔國民に認めらるゝものに至りては、其の執る所の何の道たるを問はず、其の人の存否は直接、間接に國家の進運に關すること甚だ大なるものあり。是を以て其の人一たび逝くや、國を擧げて之を惜しまざるはなし。嗚呼、天下の廣き、逝く者は日夜にこれあり、而して其の死の天下に知らるゝもの、果して幾人かある。

遼遠

少壯の諸子よ、諸子の前途は遼遠なり。遼遠なりと雖も、一生の覺悟は即ち今日より定め置かざるべからず。知らず、諸子は果して人に顧られざる人とならんとするか、一郷、一郡の爲に惜しまるゝ人とならんとするか、抑、亦舉國の悼惜を受くる士とならんと欲するか。

—國士—

一七 新年

曆の改ると共に、人は一歳づつ年をとるのであるが、實際は、其の度毎に生れ變つて若くなるのである。

くよくよ
行手に光明
を求む

新しい年を迎へるには新しい希望を以てするので、今年こそはと奮發するから、事業に對しての勇氣も生ずるのである。過去を顧れば、人の行爲には缺點もあり、失策もある。それを何時までもくよくよしてゐては、前途の發展は望まれぬ。過去は水に流して、行手に光明を求めるのが、處世の良法である。そしてその好機、即ち年の改る日である。

復活

我が國には、昔から大祓といふ祭式によつて、過去のあらゆる罪を一掃し、汚れた心を打棄て、復活するといふ風習がある。これは六月と十二月との二度行はれたもので、即ち我が國民は、一年に二回づつ心

身共に新になつて、復活し來つたのである。此の大祓の式は今でも行はれて居る。就中十二月は、年も新になる前であるから、此の復活の儀式が盛大に、且嚴格に行はれるのである。

そこで、我等は新年を迎へる用意としては、身分相應に、出來るだけ一切の物を新にし、清くして、形の上にも此の復活の義をあらはすことに務めるのである。春秋に富む壯者は勿論、還曆に入り、古稀に達する老人でも、其の生れ變る心持には異なる所が無い。

正月の儀式は、太古の質素簡樸の風を傳へて、今日に至つたものである。注連繩や、樅葉や、白木の三方や、

春秋に富む
還曆
古稀
簡樸

土器や、昔ながらの祖先以來の風を繼承して、毎年繰返してゆく所に妙味がある。即ち年々生れ變ると同時に、年々昔を憶ひ出してゆくのである。祖先から傳はつた掛物を懸けたり、古い道具を出したりして、遠い昔を憶ひ出すのである。

宗家

我が國民の宗家と仰がれ給ふ皇室に於ては、我等が一家に於て、家の祖先を祀ると同様に、新年には四方拜を行はせ給ひ、又元始祭を擧げさせられ、内外臣僚を召させ給ひて拜謁を許され、御宴を賜ひなどし給ふ。之を思へば、余等は今の世ながら、直ちに太古建國の昔を憶ひ起さずには居られぬ。余は橘曙覽(一)の

(一)越前國福井の
歌人。明治元
年歿。年五十
七。

(一)古事記のこ
と。

春にあけてまづ見る書(一)も天地の

はじめの時と讀出づるかな

といふ歌を、早くから深く感心して居た。これかの

(二)足利時代の連
歌師荒木田守
武の句。

元朝(二)や神代の事もおもはるゝ

と同一の思想であつて、日本人の心には、元旦と神代とは離れぬものである。

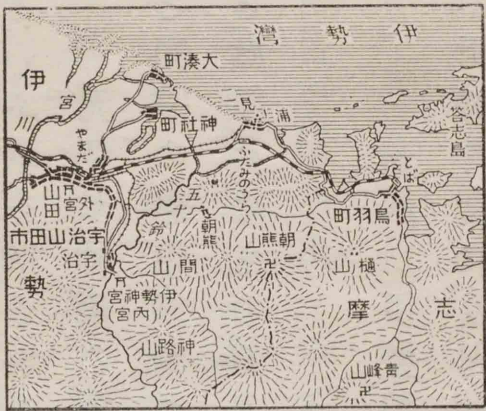
一八 伊勢神宮

伊勢神宮には内外の二宮がある。内宮は皇大神宮と申し奉り、畏くも皇祖天照大神を齋きまつり、御靈代は三種の神器の一たる八咫鏡である。外宮は豊受

齋きまつる

神域

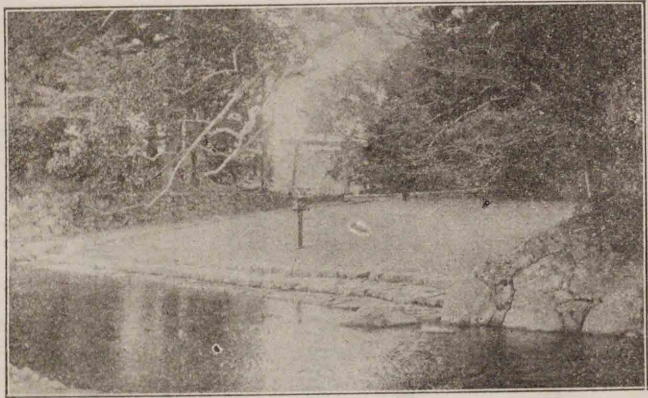
(一)伊勢國度會郡
大床山に發
りて海に入
る。



大神宮と申し奉り、豊受大神を齋きまつる。參宮線山田驛に下車すれば、外宮の神域までは僅かに數町である。神殿の造りざま、御屋根は萱葺で、檜木の白木造、丹青の飾の無い處に、神代の質素な様も想はれて、此の上もなく尊い。

外宮に參拜して内宮に參る。間の山を越えて五十町の道程である。(一)五十鈴川に架けた宇治橋を渡り、神路山の森を仰いで神苑にはいる。廣い芝生に若松の緑新しく、掃ひ清められた道には塵一つ

(一)松尾芭蕉。有名なる俳人。元禄七年(一七〇〇)歿。年五十四。



川 鈴 十 五

何の木の花とも知らず匂かな

も無い。何といふ心持のよい事であらう。いよく進めば生ひ茂つた古い杉、古い檜人間の世を離れたやうに思はれて、神威の尊さがしみぐと身にしむ。一の御鳥居を潜つて左へ曲り、二の御鳥居を通つて御垣の下に跪く。飾らぬ彫らぬ白木造の御宮、神々しといふより外は無い。昔芭蕉がこゝに詣

瞑想をこらす
油然

と詠んだのも憶ひ出され、しばし瞑想をこらす中、我が國體の尊さを思ふ心が油然と湧出るのである。神宮は古來皇室の御尊奉最も厚く、久しい間皇女が齋宮としてお仕へ遊ばされる例で、數百年間續いたが、後醍醐天皇の御代から其の事は絶えた。今は祭主には皇族が任ぜられるので、唯今の祭主宮は久邇宮多嘉王殿下である。

一九 國を祝ふ歌

よみ人しらず

しほの山(一)さしでの磯にすむ千鳥(二)

(一) 甲斐國東山梨郡七里村。
(二) 同郡八幡村笛吹川の岸。

君が御代をば八千代とぞ鳴く

(一) 藤原良經

わが國はあまてる神の末なれば

日の本としもいふにぞありける

(二) 藤原俊成

かみ風や五十鈴の川の宮ばしら

幾千代すめとたてはじめけん

(三) 源實朝

山はさけ海はあせなん世なりとも

きみにふた心われあらめやも

(四) 宗良親王

(一) 平安朝末の歌人。建永元年(一一八二)八十六歳歿。年三十八。

(二) 平安朝末の歌人。建仁四年(一一一四)八十六歳歿。年九十一。

(三) 鎌倉三代將軍。頼朝の第二子。承久元年(一一八九)一八七歳歿。年二十八。

(四) 後醍醐天皇の皇子。

(一)江戸時代の國學者。伊勢松坂の人。享和元年(二四六)歿。年七十六。

(二)京都の歌人。安政元年(二五)歿。年五十八。

君のため世のため何か惜しからん
すて、かひある命なりせば

(一) 本居宣長

さしいづる此の日の本の光より

高麗もろこしも春を知るらん

(二) 千種有功

天地とたち分れけん始ありて

はてこそなけれ葦原の國

二〇 日本の國號

大森金五郎

我が國は古くは大八洲の國と稱へた。之は海中に

數多の島々が散在して居る所を形容して稱へたものであらう。大八洲といふのは、大彌島の義で、必ずしも八といふ意味ではない。即ち洋々たる海中に、數多の島々のある所から、かく稱へたものと思はれる。

次に葦原中國といふ名稱もある。之は太古に於て、此の國の四方に蘆の生ひ茂つてゐた所から、其の蘆葦の中にある美地を賞讚した言葉であらう。又豐葦原の中國とも、瑞穂の國ともいふ。瑞穂とは水田があつて、稻の生産が豊で、其の穂の美麗なるを稱へたものであらう。なほ多くの形容詞を添へて、豐葦原の千五百秋の瑞穂の國、又は萬千秋の長五百秋の瑞穂の

國見

國などと美稱することもある。千秋萬歳、國土の豊なるを意味したと想はれる。また秋津洲とも、豊秋津洲ともいふことがある。秋津は蜻蛉の臂^{うで}帖^つの略で、是は神武天皇が國見をされた時、蜻蛉の臂帖せるが如し。と仰せられたのから起り、もと大和一國の名であつたのが、後日本全國の名となつたのであらう。又敷島とも、敷島の倭國ともいふ様なこともある。之は崇神天皇が磯城^(一)に都せられてから起つたことと見える。敷島の倭も畿内一國の名であつたが、後には日本全體の名となつたのである。尙其の外にも、伊弉諾尊は我が國を稱して浦安國、細戈^(二)千足國、磯輪^か上秀眞

(一)第十代。
(二)大和國磯城郡城島村に當る。

國などと稱へられたこともある。大國主命は玉墻内國といひ、饒速日命は天の磐船に乗つて大空から此の國土を見て、靈空見^み日本國^{くに}と稱した。支那の書には、我が國の事を倭と稱へ、魏志倭人傳及び前漢書の地理誌にも、日本人を稱して倭人といひ、其の後の書物にも、倭人、倭國等の文字が見えて居る。

かくの如く様々な名稱はあるが、神武天皇が大和に幸せられて、それより代々の天皇が十數代尙大和地方に都せられたので、大和は日本全體を指す名稱となり、大和といへば日本國といふやうになつて來た。さて漢字が傳はつて後、此の大和といふ言葉に漢

字を當嵌めることになつて、通常どろいふ字を用ひたかといふに、或は「倭」或は「大倭」或は「邪馬臺」或は「又東方」に在る國といふ所から、單に「東」の字を以て「やまと」と讀ませ、或は「日本」即ち「日」本、「日」の出る國などといふ意味の文字を書いて、之を「やまと」と讀ませたこともある。

そこで日本といふ國號の由來に就いては、古來様様の説があるが、やはりもとは「やまと」といふことに、「日本」といふ字を當嵌めたのが根元であらう。我が國の天皇の御事を「日出づる處の天子」支那の天皇のこゝとを「日の没する處の天子」などと書いたこともある。

制定す

此の日の出る處といふことが、即ち日本といふ意味であつて、初は「日本」と書いても、「やまと」と讀んだのであらうが、遂に音讀するに至つて、今日の國號となつたものと見える。然らば何時頃から「日本」といふ文字を用ひ始めたかといふと、それはなかく、判然せぬのである。或は大化の改新の時に、外國に對して、詔書に「日本天皇」と書いたといふ説もある。或は日本書紀撰定の時に、さういふ文字を定めたのであるといふ説もあるが、恐らくは國家が之を制定する前に、既に歸化人などが「やまと」といふ言葉に、様々な漢字を當嵌めた中に、「日本」といふ文字が、最も我が國の名義を

現す上に於て適當であるといふ所から、自然に廣く行はれ、遂に我が國號に此の字を採用されるやうになつたものと思はれる。かくて畿内の大和一國を指す場合には、奈良時代の頃に、「大和」といふ文字を定められ、以て日本全體を呼ぶ場合の「倭」若しくは「大倭」といふ文字と區別する事となつた。序に、「やまと」とは如何なる意義であるかといふに、之が又分らない。やまとは山處、山門などの義で、山々の間に鎖された地の意であらうといふ説もあるが、尙研究を要すべき問題であると思はれる。

—大日本全史—

二一 類似せる東西の諺

花より團子。

麵包は鳥の聲よりよし。

苦しい時の神頼。

病室は信心の寺。

かはゆい子に旅をさせよ。

鞭を惜しめば子を害ふ。

せよ。

燈臺もと暗し。

燈光の眞下は最も暗黒

なる所。

大慾は無慾。

大慾袋を破る。

弘法にも筆の誤。

良匠も過つことあり。

一寸の蟲にも五分の

蠅にも忿怒あり。

魂

珠玉

一年の計は元日にあり。月曜日は一週間の鍵。

月満つれば虧く。

満潮あれば干潮あり。

悪銭身に着かず。

盜賊は富まず。

猫に小判。

豚に珠玉を投ずる勿れ。

朝起は三文の得。

朝起の鳥は餌を拾ふ。

急がば廻れ。

愈急がば愈遅かれ。

柳に雪折なし。

蘆は立ちて檉は倒る。

人のふり見て我がふ

他人の過は教師なり。

り直せ。

船頭多ければ船山に

料理人多ければ羹かきを損

のぼる。

ず。

氣付

二二 倫敦便

拜啓。昨日大使館へ行つて、同館氣付で御差出しの御手紙を受取りました。其の後は御變りもなく御勉學の由、何よりも結構に存じます。私もこゝに着以來もはや二箇月、諸處の見物も一通りは済ませました。着いた當座は東も西も分らず、地下を縦横十文字に走つて居る地下電車も不案内で困りましたが、今は自然に覺えて、もうまごつく事ありません。新しく日本から着く人を案内したりなどして、あつばれ倫

Hyde Park.

敦通になつて居ります。唯今の住所は市の西の方で、有名なハイド・パークといふ大公園の附近の下宿屋です。宿泊人は十人程で、英吉利人の外、佛蘭西人、白耳義人、瑞西人なども居つて、食事の時は皆一室に集ります。日本人は外に一名も居らぬので、少し寂しく思ひますが、語學の勉強の爲には、此の方が却つてよからうと存じて居ります。日本大使館は四五丁隔つて居ります。

俱樂部

在住日本人の組織して居る日本人會といふ俱樂部があります。これも遠くはありません。目下在住の同胞は大使館、領事館の人々が十二三人、陸海軍の將

New York.
Chicago.
ともに北亞米
利加合衆國の
都會。
America.

校が併せて二十四五人、私どものやうな留學生が十人、其の他は三井、三菱、郵船會社、正金銀行などの人々を始め、商工業に従事してゐる人で、全體では三百人も居りませう。土曜の晩など、日本人會へ行けば、なか賑かな事です。こゝでは日本食も出來ますから、折々行つて、故國の新聞を讀み、故國の噂をするのを何よりの樂みに致して居ります。

紐育(一)やシカゴ(二)は賑かな場所も極つて居りますが、倫敦はさすがに世界第一の都で、何處へ行つても賑かです。(三)亞米利加からこちらへ渡つて見ると、やはり古い文明國の偉大な點がわかります。古い建築物や、

Westminster.
er.
Saint Paul.
(三) 倫敦市中テ
△ス河の邊に
在る古城。

古い記念碑や、皆英國の歴史、歐洲の歴史に關係をもつて居るので、見る物として面白い感想を浮ばせないものはありません。^(一) ウェストミンスター、^(二) セント・ポールの大寺院など、どうしても亞米利加では見られないものです。倫敦塔^(三)へも行つて見ました。中世時代の武器の陳列が心を惹いたよりも、某王、某侯といふ名高い人々が露と消えた斷首場の跡を見て、思はずぞつとしました。日本國の歴史ほど美しい歴史はないと、つくづく感じました。

大英博物館の陳列品を見ては、英國の發達の歴史、それに連れて各時代の偉人を思ひ出します。其の一

Louvre.



ク ー バ ・ フ ィ ハ 敦 倫

部圖書館には、毎日幾百といふ人が、大きな讀書室に集つて、靜かにそれぞれの研究を續けて居ります。繪畫館の繪の上には、一々硝子がはめてありますので、見にくく、近眼の私は少々弱りました。巴里のルーブル^(一)では、そんな事はありませんでした。これは氣候

South Kensington.

か何かの關係があるのでせう。南ケンシントンの博物館、こゝには理科、博物の標本などが澤山あります。が、最も感心したのは機械の標本で、一つボタンを推せば、電力で動くやうになつて居りますから、どんな精巧な新奇な機械も、一見して其の構造、作用が分るのです。日本にもかういふ博物館が欲しいなと、同行の友人と語り合つたことです。

倫敦の冬は日が短くて、霧が多くて、誠に鬱陶しう御座います。それでもハイド・パークあたりでは、氷滑が盛です。此の寒さにもめげず、男も女も戶外の運動に熱心なのは感心です。四月にもなれば、寒氣もだん

めげず

だん緩んで、公園の青葉もそろそろ芽を出すさうで、五月が日本の春の氣候ださうです。其の時分になると、色々の戶外運動が一層盛になるのです。いづれ其の中に又々お便を致しませう。皆様によろしく。

二三 セシル・ローツ

Cecil John Rhodes.
經營者

英國の人セシル・ローツは殖民地經營者として、偉大な功勳を其の祖國の爲に樹てた人である。一千八百五十三年、一僧侶の子として生れ、行くは宗教事業に従事する筈であつたが、病身であつた爲、十六歳の時養生かたぐい阿弗利加のナタルへ行つた。そ

Africa.
Natal.

天職

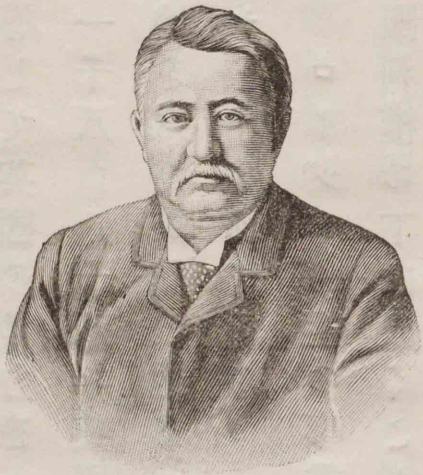
ここには兄が居たのである。ローツはこゝで金剛石の採掘に従事して、次第に其の財産を作つたが、其の間に、殖民地の經營が、國家の爲に大切な事を感じ、之を以て故國に盡すのが、自分の天職であると確信するやうになつた。

[Oxford.]

それには自分の教育を完うするのが第一と、一旦英國へ歸つて、オクスフォード大學へ入學した。併し休暇には必ず阿弗利加へもどつて來て、半年は學問、半年は事業といふ異様な生活を送つたのである。一千八百七十三年病は再び重くなつて、今後の六箇月がむづかしからうとまで醫者には言はれたが、阿弗

政治的生活
Cape Town,
阿弗利加南端
の英國殖民地
ケープ・コロ
ニアの首府。
發端

首相



ゼーロ・ルシセ

利加へ歸つて後、また次第に健康を取戻した。

ローツが政治的生活は、一千八百八十一年(一)ケープ・

タウンの議員となつたのが發端で、一千八百八十四年には、南阿聯邦の内閣に入り、九十年から九十六年にかけては、首相の職に居つた。此の間ローツは常に

英國の勢力を聯合殖民地の上に發展せしむる事に盡力したが、一方殖民地の爲にも、其の利益を増し幸福を進めることに盡力した。

專務役

扶植す

①Limpopo.

②Rhodesia.

利權の下に置く

③Egypt.

④Cairo.

⑤カイロの府。

首相となつた一年前に、南阿會社設立の特權を得て、其の專務役となつたが、これが英國殖民事業の大成功であつて、首相となつてからも、常に同會社を指導して、英國の勢力を一日一日と扶植した。之より先一千八百八十八年、英國の爲にリンポポの北方の領地を得たが、其の地はローヅの名に因んで、ローデシヤと呼ばれて居る。

ローヅが一生の事業は、阿弗利加殖民地全體を、英國利權の下に置くことであつて、其の第一歩として、北の方エジプトのカイロから南ケープタウンまで、阿弗利加大陸縦貫鐵道の敷設を計畫して、之に着手

したのである。

病氣がちな資本なしの一青年が、遠く故國を離れた殖民地に渡つて、奮闘努力の結果、自分も多大な資産を積み、しかも其の間瞬時も故國の利益を忘れず、着々其の事業に成功し得た事を考へると、精神一到何事不成カ、ラ、ンといふ古語は、實に永久の眞理である。

ローヅは一千九百二年、五十歳で世を去つた。さうして生前に積み得た多大な資産は、國家的事業の爲には、惜氣もなく散ぜられた。中にも其の遺志によつて、オクスフォード大學に寄附した獎學資金の如きは、如何にもよくローヅの人物性格をしのばせるも

獎學資金

眞理

條件

Foot-ball.
Cricket.

のである。

ローズ獎學資金を受け得る學生の資格としては、凡そ左の條件が必要である。

第一、學業に優秀であること。

第二、フットボール、^(一)クリケットの如き遊技の達人であること。

第三、信義あり、勇氣あり、義務の觀念にかたく、義侠の精神に富んで居ること。

第四、將來公共事業を成すの人物であることが、既に學生生活に於て認められるもの。

二四 大阪

なには津に咲くやこの花冬ごもり

今を春べと咲くやこの花

古は浪速と呼び、今大阪と稱して、人口百二十五萬に上る本邦第二の都府。海内無双の商業地として、市街の繁盛、商況の活潑、首府東京にも優るかと思はれる。旅客一度大阪驛に下れば、家屋の構造、市街の區劃、道路の布置、市民の風俗、また全く一種の商業的趣味を帯びてゐるのを發見するであらう。地勢は概して平坦であるが、東部一帯は稍隆起して、低き丘陵性の臺地を爲して居る。市域東西二里十九町、南北二里二

商況

布置

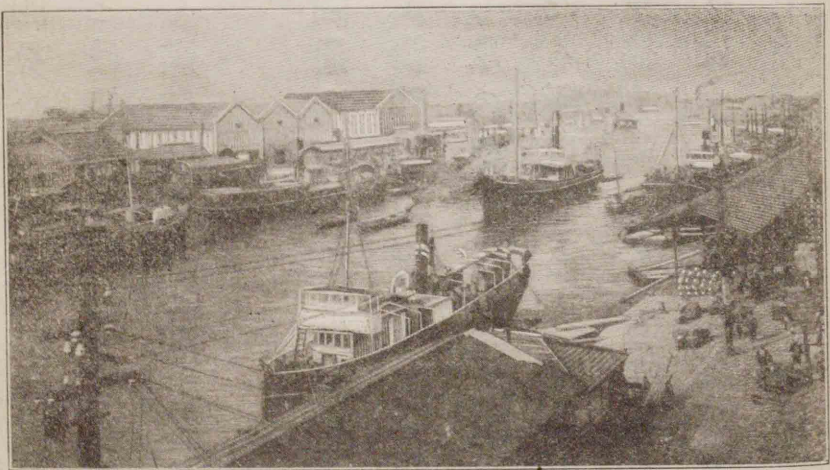
金融市場

十四町、面積三方里七〇、東、西、南、北の四區九百十町に分れて居る。古來安治川以北を天滿、蜷川以北を北の新地といひ、中央部を船場、島之内と稱し、南部は難波新地といひ、西部には堀江、立賣堀、阿波座あり、其の最も繁華なるは船場、島之内で、淀屋橋通、心齋橋通が、特に繁昌を極めて居る。船場には銀行、問屋多く、市の金融市場を爲し、堂島、中之島には官衙多く、京町堀附近には幕府時代に於ける大阪風の繁華がなほ残つて居る。仁徳天皇の高津宮の古はいはずもがな、豊臣秀吉が此に城を築いて天下に號令し、また天下の豪商を集めてから頓に繁華となり、豊臣氏の亡んだ後も、

(一)第十六代。
いはずもが
な
(二)天正十一年。

波及す

尙全國商業の中心地となり、各藩の物産交換の大市場として、此の地の物價の一高一低は直ちに全國に波及したのである。王政維新の後も、關西の經濟界、商業界は全く本市によつて左右せられ、其の海外貿易額も、大正九年には輸出四億七千二百萬圓、輸入一億八千五百七十八萬圓に上

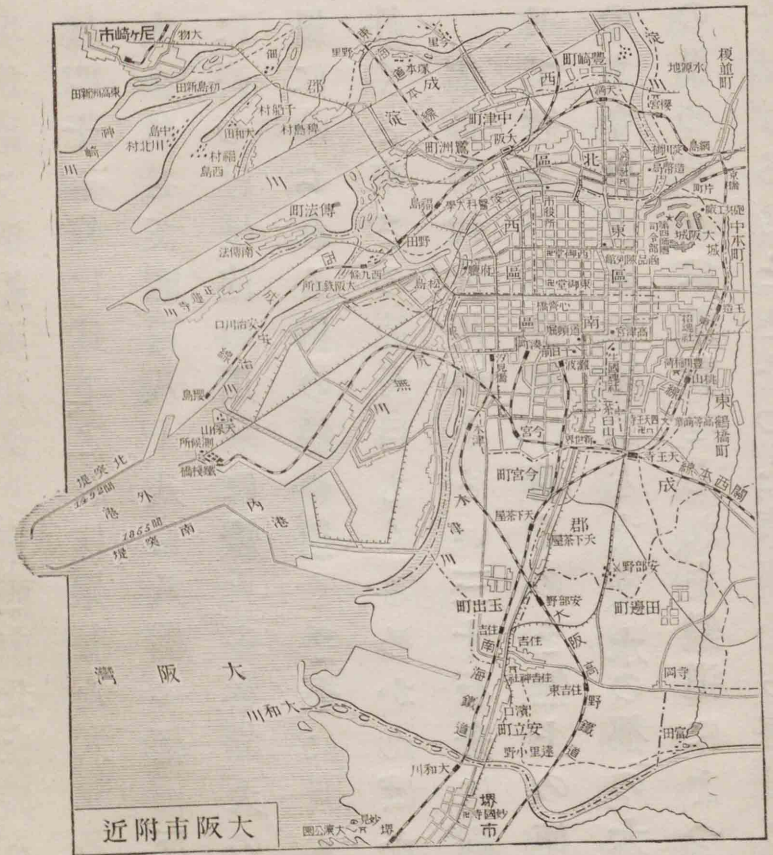


大阪安治川口

り、輸出は全國總額の二割四分、輸入は八分を占めて居る。中にも工業の盛なことは我が邦第一で、工業會社、諸工場多く、煙突から吐く煤煙は全市を罩めて、煙の都と稱せられて居る。

市内には大小の河川が四通八達して、舟楫の便を備へ、西には大阪灣を控へて、海陸運輸交通の便が宜しい。其の「煙の都」たるは即ち「水の都」たるが爲で、水の都たるはやがて又「橋の都」たる所以である。見よ、山城より落ちて流るゝ淀川は、京橋を過ぎて寢屋川と合し、巨流愈、西方に落ちて、こゝに中之島を作り、餘勢二流に岐れて堂島川となり、土佐堀川となり、共に西南

舟楫の便



に奔り、末また合して安治川となつて居る。これを市内の大川として、其の他木津川あり、尻無川あり、東横堀川あり、西横堀川あり、長

夕陽西に春
づく

往くさ來さ

堀川あり、道頓堀川あり、東西南北に流れる川々の數は四十五條に達し、これに架した大阪名物の橋梁は、大小併せて四百八十、八百八橋の稱に反かぬ。夕陽西に春づけば、淀の川瀬に燈火の影滿天の星と落ちて、風にゆられる柳の絲の、招く手振に月もほのめいて、往くさ來さの涼舟、目もくるめかんばかりである。
舊幕時代淀川の小さい三十石舟に靜かな夢を載せて、寝ながら伏見に着くのを無上の便利と考へたのも、今は古老の物語となり、水の都の大阪は、今蜘蛛の巢のやうに敷設せられた鐵道によつて、一入利便を感ずることとなつた。京都から梅田の大阪驛を經

線路交叉す

て神戸に至る東海道線を始として、關西線あり。片町線あり。福知山線あり。城東線あり。西成線あり。其の他南海鐵道あり。大阪高野鐵道あり。線路交叉複雑して、旅客をして行く手に惑ふの感あらしめるのである。

—鐵道旅行案内による—

二五 洒落と機智

一 池野大雅の古瓦

池野大雅(一)勿來關址を訪うて其の遺瓦を拾ひ、之を錦の囊に納めて携へ歸りぬ。途中に二三人の兇賊あり、大雅が錦の囊を首に懸け、朝夕身を放たず秘藏す

(一)有名なる家。安永五年(一七八六)二月二十四日、年五十四、(二)警城國石城郡。常陸の國境にあり。

兇賊

秘藏

平然
冷笑

呆然

(一)安藝藩の學者。文化十三年(二四七三)歿。年七十一。

るを見、これ必ず黄金なるべしと想ひ、三日の間後になり先になりて附狙ひしも、遂に其の隙を得ざりしかば耐へかねて、或日路傍の茶店に憩ひし時、足下はよくも大金を持ちて獨旅せらるゝよ」といひけるに、大雅平然として、それは何の話ぞ」と問ふ。賊冷笑して、「足下の首に懸けたるものよ」といへば、大雅大いに笑ひ、錦囊の中よりかの破瓦を取出しつゝ、貴客も亦かやうの物を好まるゝか。これは勿來關の遺品なり」とて見せければ、賊呆然として去りぬ。

二 頼春水の羽織

頼春水は山陽の父にして、學問を以て著れたり。赤

赤貧洗ふが如し

(一)備後の學者。文政十年(二四八七)歿。年八十。
(二)「われ見ても久しくなりぬ」の江の、岸の姫松幾代(今集)

(三)下總國香取郡佐原町の人。舊姓は神保。文政四年(二四八一)歿。年七十七。

貧洗ふが如く、常に白地の古羽織を着し、起居整然たり。或時友人なる菅茶山之に戯れて曰く、「われ見ても久しくなりぬ古羽織」と。春水言下に答へて曰く、「君の袴は幾代經ぬらん」と。二人大いに笑ひき。

—逸話選による—

二六 伊能忠敬の晩學 幸田露伴

忠敬、年十八にして伊能氏の養嗣子となり、五十歳にして家を其の子景敬に譲るまで、自ら抑へて平々凡々の人となり、一意専心、唯伊能家の衰へたるを興し、おのが任務を、最も圓滿に、最もうるはしく果さん

才氣

一舉手一投
足の勞

情を屈し氣
を抑ふ

徳量

事を期し居たりき。

およそ才氣あるものの常として、己が欲せざる事には、一舉手一投足の勞をも惜しみ、單に己が欲する事にのみ身を委ねんとするは、免れ難き習なり。たとひ己が欲せざる事なりとも、其の爲さざるべからざる事なる以上は、甘んじて我が情を屈し、我が氣を抑へて、我が爲すべき事をなすは、其の人啻に才氣あるのみならず、また實に徳量ある人なりといふべし。世に才氣ある人は多し。才氣ありて徳量ある人は少し。年少にして才のみ勝れたるは、譬へば、鋭き刀の肉薄きが如し。物を截ることはよくすべし、折るゝ虞

奇才を抱く

市井の凡人
に伍す

丹誠

は免るべからず。されば世に、奇才を抱きながら、成功を見ずして中途に事を廢する例は、數へも盡し難し。忠敬が算數、曆術の學を嗜み、且之をよくすべき資を



伊能忠敬

抱きながら、自ら甘んじて市井の凡人に伍し、伊能氏を嗣ぎたる上は、伊能氏を榮えしむべし。といふを唯一の望として、三十餘年一日の如く、ひたすら家業に丹誠したるが如きは、實に其の徳量の大きいなるを見るべきなり。

かくて伊能家は興りぬ。景敬は家を継ぎぬ。一家の

事また憂ふべきものなし。忠敬が伊能家に對する義務は、こゝに於て圓滿に果されたりと謂ふべし。

忠敬は始めて閑散の身となりぬ。忠敬の身はこれより忠敬の自由に用ふる事を得べし。此の時は忠敬年既に五十歳。常人にありては、もはや老境に入るべき時なり。されど心の壯なる人には、何歳の時も前途有望なる青年の春なり。爲すある人には、如何なる場合も、我が力を試みるべき處たり。忠敬は常人が世の務を辭し、花月の遊を事とすべき時に當りて、始めて學に就き、而して後漸く世に出でんとせり。後の爲すあらんと欲するもの、苟も眞に爲すあらんと欲せば、

老境に入る

爲すある人

飄然

寓

笈を負ふ

青年空しく過ぎて、身の將に老いんとするを歎ずる事なかれ。

さる程に、忠敬は其の郷里佐原を出でて、飄然として江戸に到り、寓を深川に定めて一學生となれり。年こそ老いたれ、實に一學生とされるなり。尋常一様の笈を負ひて郷關を出て、都門に遊びて師を尋ね、學に就くところの書生と異なるところは、唯其の若きと老いたるとの差のみ。かくして忠敬は身をおのが好める學に委ねたるが、おのが満足し信仰すべき師を得ることは容易ならざりき。

折から幕府には曆法改正の舉ありて、之がため特

(一)寛政九年に成る。寛政曆と稱す。

(一)大阪の人。名は至時。文化元年(二四六)一。歿。年四十六

に大阪より高橋作左衛門といふ者を召出でたり。作左衛門、東岡と號す、算數曆象の學に精し。忠敬急ぎ東岡を訪ひ、其の學の深きに服して、直ちに師弟の契を結びぬ。時に忠敬は五十歳にして、東岡は三十二歳なりき。普通の人情にては、己より年若き人に會ひては、たとひ己が學業など其の人に及ばずとも、尙強ひて自ら高ぶり、敢へて頭を下げざるが習なれども、徳量ある忠敬は、いかでか眞に敬ふべき學識ある人に向ひて拜伏するを厭ふべき。喜びて其の門下生となれり。然れども同門の學生等は、師たる東岡の若くして、弟子たる忠敬の老いたるをば、屢笑柄としたりとい

笑柄

ふ。

晩學の難きは、實に何れの世にありても、かゝる事實の存するが故なり。是を以て、非凡の士にあらざれば、大抵自ら耻ぢて、師に就き學を修むる勇氣を失ひ、終に空しく志を抱いて、墓穴に入るに至るなり。本來よりいへば、老いて學ぶは、たまく、其の志の淺からざるを表すのみ。又何の不可あらん。況や又何の耻づべき所かあらん。思ふに、區々たる群小の嘲笑も、忠敬に於ては、唯蛙鳴蟬噪を聞くが如くなりしなるべきのみ。かゝれば忠敬と同門生との優劣勝敗は、比較するまでもなく明らかなることなり。忠敬の學術は

晩學

群小

蛙鳴蟬噪

決潰す
蘊奥を極む
肩を比す

さながら堤防の決潰して洪水の押寄するが如き勢を以て歩を進め、終に其の學の蘊奥を極めて、東岡門下に肩を比すべき者なきに至れり。

暮齡用ふるに堪へず

勇往直前

かくて忠敬が始めて幕府より測量の命を蒙り、其の修得したる學術を、實地に運用する機に際したるは、實に其の年五十五歳の時なりき。五十五歳といへば、人は暮齡用ふるに堪へずとする年齢なり。されど忠敬は氣力旺盛、さながら壯年の人の如く、測量の命下るに會ひて、喜色滿面に溢れ、即日にも出發せんとする勢ありきといふ。忠敬が事に當りて勇往直前、險阻に屈せず、風濤に辟易せず、遂に其の志す所を完成

したりしは、一に此の元氣勃々として、燃ゆるが如き熱心を、胸裏に藏めたるによれるなり。誰か日本人を早熟早老の人種なりと言ふ。これ豈我に伊能忠敬あるを知らざる者にあらずや。

——露伴叢書による——

二七 機械と道具と人間の手

輕蔑

吾々は往々畜類を輕蔑して四つ足と言ふ。なるほど吾々が二本の脚で直立が出来、これがため自由な手を有するに至つた事は、吾々人類の大いなる誇である。

此の自由な手を持つやうになつて、吾々は始めて

經濟的發達の根本動力である諸道具を造り出すやうになつたのである。手があればこそ、始めて今日の人間になつたとも言へる。そこで吾々は手で人を代表させ、相手、手代、騎手、名手、遊手、選手などといふ。また眼に見、耳に聞き、口で話しても、なほ見手、聞手、話手などといふ。

かやうに手は人間にとつて至つて大切なものであるが、其の手の延長されたものが、畢竟道具である。其の道具の更に延長されたものが、今日の機械である。機械は發動機と、傳動機と、道具との三つの部分から出來てゐるもので、即ち道具に加へて、更に其の道

具を動かす爲の仕組を以てしたのである。されば道具は單に人力の補助を爲すに過ぎぬが、機械は之と異なり、謂はゞ自動的の道具で、晝夜の別なく獨り力チカチと動く時計などは、最も小規模な機械の一例である。

既に機械は自動的である。さればこそ、一たび之を貨物の生産に應用すると、吾等は別に勞役に服しなくても、容易に物資の豊富を供給を得るのである。今日西洋諸國の經濟が、驚くべき發達をした根本原因は、全く此の機械の應用が、各方面に普及した爲である。彼等の富は斷じて勤儉貯蓄の結果のみではない。

刻苦精勵

刻苦精勵したのは、人ではなくて、機械である。
 試にこれを新聞紙の印刷に就いて考へて見るに、
 若し之を木版に彫つて手刷にしたら、勞力も非常で、
 費用も亦夥しいものであらう。機械の力に依ればこ
 そ、何十萬部を瞬く間に刷上げ、一日十頁、一箇月三百
 頁といふ大部のものを、僅か一圓ぐらゐの代價で賣
 る事が出来るのである。今より二十年前、米國で調査
 した所に依ると、三萬六千頁の新聞紙の印刷及び折
 込に要する勞働時間は、全く機械を使用すると、僅か
 に一時間と八分を要するに過ぎないといふが、これ
 は二十年前の事種々改良の行はれた今日では、其の

差は更に著しいであらう。

又米國の農業者が、若し機械を用ひず、五十年前の
 舊い方法で、現在の收穫を得ようとするならば、之が
 爲に生ずる増加生産費は、玉蜀黍にあつては十億四
 千六百萬圓、小麥にあつては一億四千八百萬圓、燕麥
 にあつては一億六千萬圓の巨額に達する計算であ
 るといふ。

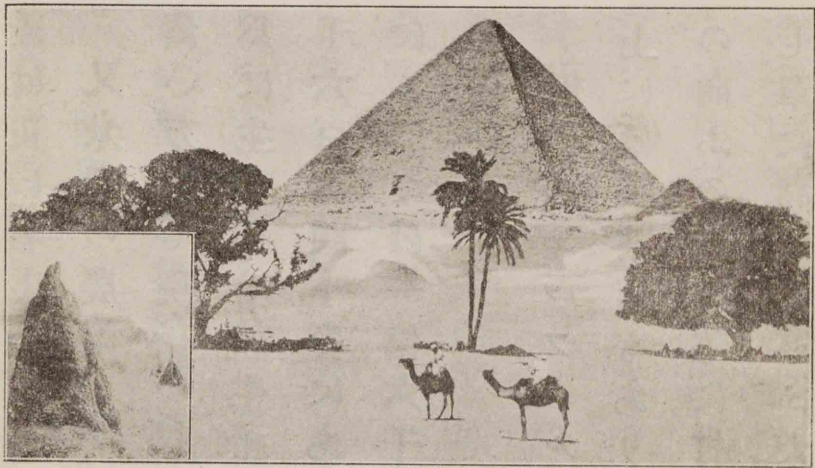
巴里の⁽¹⁾エッフェル塔の高さは無慮九百八十呎、塔
 上には喫茶店もあり、無線電信の設備まであつて、海
 の向ふの加奈陀に打電することが出来るといふ。併
 し單に高いといふだけなら、遠い昔の埃及人も、高さ

(1) Eiffel
 無慮

(2) Canada

Pyramid.

Australia.

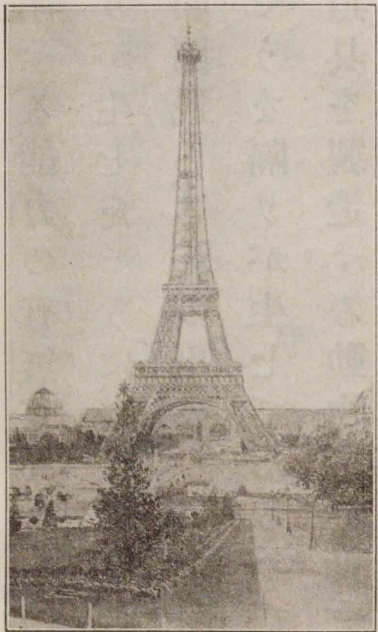


塔の蟻とドゥミラビ

四百八十呎のピラミッドを造つて居る。かの白蟻でさへ、阿弗利加やオーストラリヤに居る者は、約二丈に達する塔を作る。人間から見ると二丈は驚くに足らぬが、白蟻自身からいへば、彼等の身長約千倍に及ぶ高さである。たとひ簡單な道具だけでも、否、道具は全く無くとも、必ずしも高い塔が作られぬといふ

譯は無い。たゞ問題は時間と努力に比較にならない差異があるといふことである。

埃及最大のピラミッドを造るためには、約十萬の人間が、殆ど三十年に亘つて使役されたのであるが、其の二倍以上の高さを有するエッフェル塔は、博覽會の餘興として、僅か三年間に落成されたものである。昔は馬上の急使でも、津輕(一)から薩摩まで二十二三日乃至三十日を要したが、今は坐ながらエ



塔ルエフエ

(一) 陸奥西部の
舊稱にて、今
の津輕五郡。

ツフェル塔上から、海上遙かに何千哩を距てた遠い加奈陀に通信が出来る。畢竟機械の特長は、勞せずして功を収める點に在るのである。

思ふに道具を發明する能力の有無で、人間と動物の生活に根本の隔りが生じたやうに、機械を發明し、之を利用し得る文明國民と、これの出来ない未開國民との間には、同じやうな隔りが生じてゐるのである。若し人間を以て道具を製造する動物と定義することが出来るならば、所謂文明人とは、機械を使用する人間と定義することが出来る。そして蟻や蜂が如何に勤儉貯蓄しても、到底道具を有する人間に及ば

ぬ如く、未開人も亦如何に勤儉貯蓄しても、到底機械を使用しつゝある文明人に及ぶことはできないのである。

—河上肇の文による—

二八 眞の勇氣

坪内逍遙

「楯を抱いて歸れ。然らざれば楯に載せられて歸れ」とは、昔Spartaスパルタ國の母親等が、其の子等の軍に出づる時常に言含めし言葉なりとぞ。戰國に生れたる者は、死ぬることを恐れずして、卑怯と言はるゝことを耻ぢたりき。

昔は勇敢の氣象を貴ぶこと今に倍せり。男は十四

徇ふ

(一)名は幸盛。戰國時代の尼子氏の臣。天正六年(一五七八)歿。年三十六。

五歳にして戰場に出でし例幾らもあり。日本武尊は十六歳にて熊襲を誅し給ひ、爲朝は十八歳にて九州を徇へたり。只昔の勇氣は腕力と殺伐とを伴ふを例とす。今いふ勇氣は其の意味廣し。

戰國の武士山中鹿之助は大勇士とならんと志して、七難八苦に遭はしめ給へ。と常に神に祈りたりといふ。又或人は、

憂き事のなほこの上に積れかし

かぎりある身の力ためさん

と詠みたりき。何にてもあれ、苦しきこと、怖ろしきものの、折重りて攻寄するを怖るゝ心無きが勇氣なり。

只怖ろしき苦しさを忍ぶばかりのことは、女も爲し得る所なれど、進み戦ひてこれに打克つは、男ならでは爲し易からず。腕力は生れつきにも由ることなれば、乏しきも是非無し。勇氣無きは男子にあらず。されど勇氣にも階級あり。弱き者を苦しむるは勇に似て勇にあらず。

我意を張る

盲人蛇におぢす

暴虎馮河

我が腕力を頼み、又は多勢の後援を頼みて、妄に我意を張りて人と争ふことを好むが如き、又は何の思慮準備も無くして危きことを試みるが如きも、盲人の蛇におぢざる類なり。これを向ふ見ずと言ひ、粗暴と呼ぶ。即ち暴虎馮河の勇なり、眞の勇氣にあらず。

(一)豊臣秀頼の臣。元和元年(一六二二)陣歿。年二十五。
(二)平清盛の父。仁平三年(一一八三)歿。年五十八。

奸曲

眞の勇者は、我が善しと信じたることの爲にのみ戦はんと欲す。故に輕々しく危きに近づかず。されど一たび其の事に當りては、命をも惜しまぬなり。或は單身にして悪人を取挫ぎ、或は弱者を救ふ。人の知ると知らざると、援くると援けざるとは問ふ所にあらず。つまり勇氣を見せびらかさぬが眞勇の證據なり。茶坊主に辱められて争はざりし木村重成の優しき、油つぐ老僧を手捕りにせし平忠盛が思慮沈着など、好き例なり。

同じく眞勇といふうちにも、文明の今日は、十年、二十年引續きて艱難と戦ひ、奸曲を取挫ぎ、幾たび敗れ

ても屈すること無く、斃れて後已む勇氣をこそ養ふべきなれ。
——中學修身訓——

二九 極地の探検 其の一 新保 磐次

營利的

(一)Care of Good Hope. 西曆一四八六年葡萄牙人アマズの發見。

鼻あかす

極地探検、これ近來の一大問題なり。遠く本源を尋ぬるに、極地の探検は最初營利的より起りて、後に學術的となれるなり。大昔の事は暫くおき、我が戰國時代の前より、葡萄牙人は阿弗利加の南端なる喜望峰を廻りて東洋に出づる航路を發見し、盛に印度と交易せり。されば航海を以て誇とせる英國人は、一層便利なる近路を求めて彼等に鼻あかせんとて、さてこ

そ極地の航海に力を用ひそめたるなれ。げに地球儀にて見る時は、歐羅巴より東洋に至らんには、喜望峰を廻らんより、直ちに北氷洋を突きぬくる方、遙かに航路短ければなり。其の他鯨は北海に多く住むといふ中に、いづれの邊に最も多く住むかを探検するも、亦營利目的の一なりき。已にして北極航路の困難にして實用に適せざるを知るに及び、目的は學術的となり、専ら氣象、磁石力、陸地の分布、動植物等の調査をなすに至りぬ。

嚴密にいふ

(一)我が國の最東北端。

極地を嚴密にいへば極圈以内なり。北極圈は吾が千島の占守(一)より北約五百里に在り。北極圈より北極

點に至るには更に北方八百里なり。占守の嚴寒氷雪、交通の不便、食料の不自由等の話を聞けば、移住せる人々の上を想ひやるもたゞ涙ならずや。まして極地の事なれば、風雪の險惡なる、固より筆舌のよく及ぶ所に非ざるべし。無數の大氷塊は海を蔽ひて流れ來り、熟練なる船員は右に避け、左に逃れ、努めて衝突を防ぐといへども、誤つて之に挾まるゝ時は、船は大抵押潰さるゝを免れず。一日の行程僅かに一哩餘に過ぎざることあり。或は氷雪に閉ぢられて進退こゝに谷り、氷の中に穴を掘りて、其の内に數月を送ること少からずかゝる間に限りある食料は盡き、或は久し

進退谷る

Sir John Franklin
英國の北極探
検家。西曆一
七八六―一八
四七。
Brenlund.

く果物、野菜を取らざるため壞血病に罹り、一隊の勇士枕を並べて氷海孤島の中に死することあり。有名なるフランクリン探検隊の全滅も、亦かくありしなり。最近に丁抹人ブレンルンドが飢寒の爲に死せし時、最後の日記には左の如く記しありき。

「余は北緯七十九度に於て、次第に虧けゆく月の下に死す。余が足は凍り、四邊は暗し。行くこと能はず。二友の屍は此の灣の中央にあり。」

學術の爲、國家の名譽の爲とはいひながら、何ぞそれ最期の悲惨なるや。

かのフランクリン探検隊の全滅は、遠征史中の一

最期

Crimean War.
英、佛、土三國の聯合軍と露國との戦争。西曆一八五六―一八五

大悲劇なりき。英國は續々と搜索隊を派遣し、八年の後始めて彼等が一島に餓死せりといふ消息を得たり。然るに當時英國はクリミア戦争に忙しく、直ちに遺跡を弔する船を出さざりければ、フランクリン夫人は奮然として私費を抛ち、且友人の助を得て一の搜索隊を發遣し、良人一行の遺骨及び遺物を収めたり。此の事件の搜索隊、前後四十有九、費用一千萬圓に及べりといふ。

三〇 極地の探検 其の二

かゝる困難の中に非常なる大功を立て、世界の賞

贊を博せし豪傑亦少からず。いで其の二三を紹介せん。第一はノルデンショールド、第二はナンセン博士、第三は讀者の耳に尙新なるペアリー大佐なり。

①Norden-
skjöld.

ノルデンショールドは鑛物學者にて、瑞典國より派遣せられし探檢家なり。彼はフランクリンの航路に反し、亞細亞の北を通過して東洋に出でんとせり。途中氷に鎖されてそこに越年せしかど、其の間種々學術上の觀測をなし、遂に亞細亞の東なるベーリング海峽を経て東洋に出で、其の使命を果しぬ。歸途我が國にも立寄りて、盛なる歡迎を受けしは、明治十三年のことなりき。嘗て徳川三代將軍の時、英國の探檢

①Behring.
亞細亞と北亞
米利加との二
大陸を分つ。
使命を果す

家は、國王より我が日本に寄せらるゝ書を奉じて同じ航路に就きしが、志を得ずして途中より歸りき。かくて此の航路全部を通過せし者は、古今唯ノルデンショールドあるのみ。

①Nans n.
(西曆一八六一
生)
①Peary.
(西曆一八五四
生)

②Greenland.

ナンセン博士は諾威の動物學者なり。ペアリー大佐はもと米國の土木技師なりき。北亞米利加の東北にグリーンランドといふ一大陸地ありて、大部分極圏の内にあり。此の陸地は嶋なりや、或は北極まで續ける大陸なりや、また其の内部は如何なる有様なるか、近頃までは全く世に知られざりき。明治二十一年、ナンセン博士は此の陸地の東岸より西岸に向つて

洶涌

横斷し、内部は一帯の氷高原にして、人の住居に適せざるを報告せり。

ついでベアリー大佐は此の陸地の北部を横斷せり。彼は高原の北端より東岸に達し、海拔四千尺の氷の崖の上に立ち、四方をきつと見渡すに、洶涌たる氷海は東より北に周りて、此の陸の北極に接せざる事を發見せり。其の時の心地いかに雄快なりしぞや。ベアリー夫人は此の遠征に同伴して、途中良人の病を看護し、遂に偉功を成さしめたり。夫人は又妊娠の身を以て、良人再度の遠征に隨伴し、船中にて玉の如き女兒をまうけたり。此の女兒は最北に生れたる文明

徑路

下に人の目には、
 二六人の目に、
 同力に南極に、
 到れるアムン



陸上極北の行一士博ンセンナ

人として、世界に一種の名譽を得たり。

かくて後ナンセン博士は、流水が北極點附近を通過すべき徑路を考へ、之を利用して北極に到らんと期せり。明治二十六年、彼は堅牢なる一種の船を造り、古來探檢家の大敵とせる流水に乗じて、極海に漂流すること凡そ一年半、流水

滄海

が稍北極に遠ざからんとするを見るや、決然として船を捨て、上陸し、橈によりて北極に向ひぬ。彼はいかにして再び歸るべき。大膽といふも餘りありといふべし。彼は行けども行けども高低凹凸の氷原にして、恰も滄海の大浪が其の儘凍りつきたらんやうなるを見て、只荷物の積卸に年を重ぬべきを念ひ、慨然として歸途に就きぬ。かくて或時は流水に乗り、或時は革船に乗り、千辛萬苦の後、とある島に着き、圖らず英國の探檢家ジャクソンに逢ひ、其の小屋に伴なはれて温き待遇を受けたり。ジャクソンが日記にかく記せり。

Jackson.

Knife.

「小屋にて湯と石鹼とを與へて身體を洗はしめしに、三年の垢と脂肪とは容易に落ちず。數回ナイフにてこそげ落して、少しく清潔になりたり。」

其の勞苦、想ふべきにあらずや。ナンセン博士遂に歸國して、大探檢家の名譽を得たり。

一方にはペアリー大佐亦北極點を志し、遠征數回、其の間兩足凍傷して、八本の指を切斷するに至れり。不屈不撓なるペアリーは、明治四十二年四月六日を以て遂に北極に達し、こゝに米國の國旗を立てたり。此の時最低温度華氏零下三十三度。蓋し北極は極地の最寒點に非ざるなり。これより先、米國の博士クック

不屈不撓

Cook.

ク亦北極に達したりと稱す。されど世間は未だ之を信ぜず。

南極圏内の探検はさのみ久しからぬ事にて、明治より凡そ百年ばかり前に始れり。これには航路發見の目的を含まず。たゞ捕鯨家の副事業と、純粹なる學術的觀測とに基づけり。近代の事なればにや、悲惨なる遭難の事實は北極探検の如く多からざれど、暴風雪は南極の一名物にして、其の他内地凹凸の多き等探検を困難にする事情少からず。此の中にありて能く探検家を歓迎し、遠征の勞苦を忘れしむる氣樂者あり、名をペンギン鳥といふ。此の鳥身長四尺許、翼短

〔Penguin.〕



南極に於けるスコット大佐

成し、人間の來るに逢へば、歩を止め、首を屈して敬禮し、それより人語の如き調子を以て長々と呟く

こと、あたかも歡迎演説をなすが如しといふ。南極探検家の中にて最も著しき功を収めたるは、近時の英人シャックルトン大尉と、同スコット大佐

〔Shackleton.〕
（西曆一八七
四年）
〔Scott.〕
（西曆一八
六一年）

Amundsen.
(西曆一八七
三生)

(名は轟。

となり。大尉は明治四十二年南極を距る事僅かに五十里の點に達せしが、食料盡きて引返しぬ。四十三年スコット大佐更に探檢の途に上り、必ず南極に至らんことを期す。英國皇后陛下は爲に國旗を親授し給へり。これと前後して諾威人アムン(一)ドセンあり。四十四年十二月を以て遂に始めて南極に達し、次いでスコット大佐も、翌年一月、一旦目的地に達したれども、歸途風雪に阻まれて、壯烈なる最期を遂げにき。
こゝに吾が國に白瀨輜重兵中尉あり。早くより極地探檢の志を抱き、身を寒地の氷雪に馴らしつゝ、ありしが、さきにはペアリ―大佐の成功を聞き、今又ス

雄心勃勃々

終局の目的

コット大佐の大志を聞きて、雄心勃勃々禁じ難く、匆匆遠征の途に上りき。其の結果は大ならざりしが、更に完全なる準備と忍耐とを以て此の志を繼ぐ者あらば、終局の目的を達し得るに庶幾からんか。

—女子國語讀本—

三一 北國の初春

相馬 御風

六七尺も積つてゐた雪が、いつの間にかすつかり消えてしまつた。解けた雪は、解けるあとから、殆ど全く人間に氣附かれずに、或は蒸發し、或は大地に吸込まれ、或は流れ去つて、どうして無くなつたか解らぬ

やりに無くなつてしまつた。

幾月かの永い間、深い雪の中に閉込められてゐた北國の子供等が、久しぶりて黒い大地の面を見出した時に歡ぶ有様は、全く言つて見よりのないものである。まだかなり深く消残つてゐる雪の所々に、黒く濕つた土が覗き初めると、子供等は言ひあはせた如く、次々にそこへ集つて行く。そして殆ど躍り出さんばかりの嬉しさで、土を踏廻る。田や畑の所々に見え出した黒土の斑點には、鷗や、鴉や、雀がまづ群をなして集る。彼等の上にも、生々した歡が輝いて見える。

むらぎもの心たのしも春の日に

鳥のむらがり遊ぶを見れば

から良寛(一)が歌つた心もちも、特に雪國に住んだ者に、一層深い味があるのである。

「長々の月日、雪の下に忍びたる落、蒲公英のたぐひ、やをら春吹く風に時を得て、雪間々々を嬉しげに首さしのべて」と一茶(二)が書いたやうな若草の歡も、雪國に住む者にして、始めてしみぐと味ははれるのである。

大地を踏歩く人の足音の久しく聞えなかつたのを、静かな夜にふつと聞きつけた時の、一種微妙な懐かしみと歡ばしさ、そんな心の經驗も、雪國に住めば

(一) 越後長岡の僧。天保中寂。年六十餘。

(二) 俳人。信濃の人。文政十年(一八二八)四月八日歿。年六十五。

こそである。

あづさ弓春になりなば草の庵を

とく訪ひてまし逢ひたきものを

かういふ良寛の歌も、北國の冬といふことを考へないでは、なかく理解されない。

全く北國の住民の春を待つ心には、測り知れない深さが窺はれるのである。
— 樹かげ —

三二 太陽と春

やはらかい風が、

輝いた海洋から地上にのぼる。

光つてゐる畑、

光つてゐる樹、

光つてゐる葉、

一つ一つがみんな春の呼吸。

緑の春は、

たのしげにゆらぎ、

よるこばしげにゆらぎ、

「生きてゐる、生きてゐる。」と光の中で囁く、

黒い土が其の下で燃えながら、

黙つて光を吸ふ。

解放

もえ立つ春の碧の空、
 忍んだ冬の寒い憂鬱から、
 南の國の春は解放される。
 枯草の間の小さな草の葉、
 菜の色、大根の色、
 ふかく、とこめた太陽の愛。
 とけるやうなやはらいだ空氣。
 いま、
 路をゆるやかに行く農夫。
 其の手が光る。

其の鍬が光る。
 輝いた地上の光に、
 とけて行く愛の世界の春。

―福田正夫、農民の言葉による―

三三 雨 後 德 富 蘆 花

三月七日

養花の天

近來よく降る。降らなければ曇る。所謂養花の天。
 今日日は日が出た。朝から暖だ。鶏の聲が殊に長閑に
 聞える。昨日終日終夜の雨で、畑の土も眞黒に潤うた。
 麥の緑が目立つて濃くなつた。緑の麥は、見る眼の歡

喜である。それが軟な日光に笑み、若しくは面を吹いても寒からぬ程の微風にそよぐ時、或は夕雲の翳に青黒く黙する時、花何ものぞといひたい程美しい。

隣家ではもう馬鈴薯を植ゑた。

午後少し高井戸(一)の方を歩く。米俵を積んだ荷馬車が来る。行きずりにふと目にとまつた馬子の風流、俵に白い梅の枝が挿してある。白い蝶が一つ、黒に青紋のある蝶が一つ、花にもつれて何處までもと、ひらひら飛んで跟いて行く。

朝の模様では、今日は美晴と思はれたが、やはり氣の定まらぬ日であつた。時々ざあとき雨のやうに降

(一) 東京府豊多摩郡。

つては止み、東に虹が出たり、西に日が現れて遠方の屋根が白く光つたり、北風が来て田圃の小川を縁どる女竹の藪をざわ／＼鳴らしては、きら／＼日光を跳らせたりした。空の一部は印度藍色に濃く片曇りがして、村と緑の麥の一部とは眩しい片明りがしてゐる。

—みゝすのたはこと—

三四 閉塞隊の出發に臨みて別を

兄に告ぐ 廣瀨 武夫

第一次旅順口閉塞の擧に對し、先考(一)と山縣先師(二)とに代り武勇絶倫の賞詞を賜ふ。此の賞詞は他の千萬

先考
(一) 中佐の父廣瀨重武。
(二) 山縣小太郎。

友情切々
有終の美を
濟す

人のあらゆる稱讚の辭にまして、弟の最も榮とする所なり。而して友情切々、上士の功に誇らざるを訓へ、更に有終の美を濟さんことを望ませらる。感激の至に勝へず。

今や

第二次

閉塞隊

として

福井丸に上らんとす。賜ふ

所の手書は、先考の眞影と共に収めて懐に在り。弟は天佑を確信し、再び其の成功を期すると共に、武士と



長曹兵野杉と佐中瀬廣
(田神市京東)像銅のと

手書

天佑

して決して家名を汚すこと無きを自信す。

七生報國。一死心堅。再期成功。含笑上船。

愈、御武運の長久ならんことを祈る。再拜。

明治三十七年三月十九日 頑弟武夫

兄上様

第一次閉塞に際し、八代兄其の寫眞を贈つて形影相伴なふの意を寓せらる。今回も同じく収めてポケットにあり。

勤王、大義太分明。報國、丹心期七生。

傳家、一脉遺風在。盟舉、名聲弟與兄。

寄家兄言志

弟武夫

(一)兄廣瀬勝比古。當時の海軍大佐。
(二)海軍大將八代六郎。當時の朝日艦長。形影相伴なふ。
(三)Pocket.

幾回いふも志は同じ。弟は「七生人間滅國賊」の楠氏兄弟の精神を以て我が精神と心得候。

廣瀬中佐詳傳

三五 皇室と國民

西洋各國の歴史を見よ。支那の歴史を見よ。一朝亡びて一朝興り、革命に次ぐに革命を以てし、昨日までは九五の位に居まし、帝王にして、今日は斷頭臺上の露と消え給ひしも尠からず。近くは全露西亞皇帝の、俄に其の位より逐はれて、シベリヤに一流人となり、はか無き最期を遂げ給ひしが如き、我が國民より

Siberia.

革命
九五の位

不可解

見れば、殆ど不可思議、不可解の感無くばあらず。外國の事情をのみ知りて、日本の國史に明らかならざるもの、動もすれば世界の近況を見て、我が國家の將來を危む。これ實に我が皇室と國民との關係を知らざる徒なり。

収斂

外國の歴史の記す所を見よ。國王と人民とは從來仇敵に等しかりき。國王はあらゆる豪華を極め、あらゆる収斂を敢へてして、唯自己の慾を満たさん事に努め、姦臣之を助けて、暴虐至らざるなし。國民の憤怒は火山の噴火の如く、抑壓其の極に達して後、革命となりて爆發す。歐洲各國の歴史みな然り。支那歴代の

愛撫す

興廢は、幾回となく之を繰返したるに過ぎず。王者と人民との争果てしなきに至りて、民衆は自由を求めて止まず、其の極る所共和政府の設立となれるは、今古外國史の示す所なり。

(一)第六十代。

豊穰

我が皇室、人民を愛撫し給ふこと初より父母の親みの如し。百姓を稱へてオホミタカラ(大御寶)と稱へ給へるは、上古よりの事なり。人民は皇室の別家なりといふ考もて、自らヤッコ(家の子)と稱せり。古來の神祇を祀るや、天皇は民の爲に年の豊穰を祈り、人民は天皇の爲に玉體の安全を祈りて、曾て私の利害の爲に禱らず。仁徳天皇の宮室を營み給はざりし、醍醐天

(一)後醍醐天皇御製。

(二)後柏原天皇御製。治め知る

紛擾
權臣

鞏固を加ふ

皇の寒夜に御衣を脱し給ひしを始にて、

世をさまり民安かれと祈るこそ

わが身に盡きぬ思なりけれ

治め知る我が世いかにと浪風の

やそしまかけてゆく心かな

の御製は、皆同じ御心なり。

日本歴史の紛擾は、皇室間の御不和か、權臣が野心の結果にして、一として皇室と人民との間の争たるもの無し。これ實に各國の歴史に無きところにして、萬世一系たる皇統の、世々を経て益鞏固を加ふる所以なり。

自修文

一 最も偉大なる豪傑

第一段 (金曜日、中學校の教場)

校長「今度の月曜日の宿題を上げます。『最も偉大なる豪傑』といふ題です。これまで讀んだ書物の中で、一番えらいと思ふ豪傑の例をお舉げなさい。」
學生吉田「友達に聞いてもようございませうか。それとも自分で考へ出すのですか。」
校長「自分で考へ出すといふことにしたい。」
學生逸見へんみ「本を見てもいゝんでせう。」
校長「本は宜しい課題を調べるに参考になるやうな本は何でも見て宜しい。ちやうど鈴が鳴つた。課業をしまひます。」
(校長退出)

學生倉木「天下第一の豪傑は誰だらう。僕には當てられない。」
學生入江「君、當てるのぢやない。考へるのだよ。」
學生城「そんなにむづかしくはない。僕はもう分

つた。吉田先生の言はれた事が、僕等の考へてゐる通りなら、僕にも分つてゐるんだが、先生が題をお出しになつた時、妙な笑顔をなさつたから、僕等が考へてゐるのよりも、もつと深い意味があるらしい。倉木、とにかく、歸つてゆつくり考へよう。(一同退出)

第二段 (月曜日の朝、學校の門前)

逸見入江君、君豪傑を考へ出したか。入江、考へ出したとも、少し考へてすぐ分つた。逸見、さうか。みんなどうしたらう。さあ急いで行かないと、時間に後れる。(吉田、倉木、城來る)

入江、やあ、皆來た。諸君お早う。城、入江君、豪傑は分つたか。入江、胸のポケットを叩いて見せ、大丈夫、ちやんと此處にしまつてある。倉木、其のポケットにはいる豪傑なら、鉛筆のやうな小さなのだらう。入江、それでも君のより大きいかも知れないよ。吉田、さうだ、入江君の言最も理あり。袋が大きいからといつて、中味が良いとは限らない。(校長來る)

逸見、やあ、丸井校長だ。一同、先生、お早うございます。校長、豪傑を選んで來

ましたか。一同、はい、皆調べて來ました。(一同退出)

第三段 (教場、生徒齋席)

校長、さあ、どういふのが眞の豪傑か、一人々々に尋ねて、選んだ豪傑の名を聞くことにします。城、一番にお答へなさい。城、私は豪傑といふものは、非常な伎倆をもつてゐて、何人をも恐れず、あらゆる敵にうち勝つものだと思ひます。校長、成程尤もだ、だがまだ、何かおとしては居ませんか。城、先生、此の上

伎倆
はたらき。

に、ごういふ資格が要るか、考へられませんか。校長、よろしい、外の人に聞いて見よう。併しお前の豪傑の標本は誰ですか。城、豊臣秀吉です。校長、えらい人を選びましたな。併し私は、秀吉には豪傑たる者の具へて欲しいと思ふ、或資格が缺けてゐるやうに思ふ。今度、倉木、お前の豪傑の定義を言つて御覽。倉木、先生、私は豪傑といふ者は、強ち偉い大將に限らぬと思ひます。寛仁大度で、能く人の過を恕し、それと同時に志が堅固で物に驚かず、己の生命よりも、社會同胞を愛する人でなくてはならぬと思ひます。私は中江藤樹先生を選びました。校長、大層面白い。倉木の定義はよほど面白い。又選んだ人物も立

生民
人民。

昌平
國がさかえて
世が、たひら
なこと。

派だ。處で逸見は。」逸見私は源頼朝を選んで見ました。併し頼朝は平家を亡
して父の仇を報い、六十餘州の人民を驕る平家の暴政から救ひ出したが、之
と同時に利己心の爲に奔走したやうに思はれるから、或は真正の豪傑とは
いはれぬかも知れません。尤も倉木君の説を聞くまでは、それに氣が付きま
せんでした。」校長、逸見のそこに氣の附いたのは至極宜しい。頼朝の兵を擧
げた動機は、國家生民の爲、平家の虐政を除く爲であつたとは思はれぬ。其の
志を得て後の行を見ても、博愛などいふ高尚な事を理想として居たらしく
もない。……入江、お前の豪傑は。」入江先生、私も豊太閤を選びましたが、今皆
さんの説を聞いて、間違がわかりましたから、徳川家康にします。家康は智も
あり、勇もあり、寛仁大度で、慈悲深く、天下を太平に治め、民を安穩幸福にする
ことに努めて、遂に三百年間無事昌平の代を作りました。」
校長、宜しい。入江、お前が秀吉に代へて家康を選んだのは賛成だ。さあ吉田、お
前の意見は。」吉田先生、私は一所懸命古代の豪傑を調べて見ましたが、満足
を得ませんでした。まあ孔子のやうな人が、眞の豪傑たるに近いかと思ひま

犠牲
いけにへ。

す。孔子は最も深く善惡の別を辨へ、之によつて天下億兆の民を、人の人たる
正道に導かうとしましたが、亂世で用ひられなかつたから、遂に弟子を集め、
書を著して、其の道を百世に傳へました。かういふのでなければ、眞の豪傑と
はいはれぬと思ひます。」校長、吉田の考が一番大きい。まづ今日の優等の答
案です。之については倉木、入江だ。成るべく廣く社會人類の幸福を増進せし
めた人が、一番えらいのです。併し、さういふ立派な事をするには、いろ／＼の
困難があつて、並大抵では出來ぬが、就中一番の困難は、自分のわが儘に克つ
といふのである。孔子も『己に克つは仁の本。』と言つて居られる。或場合にはわ
が儘どころか、大切な我が命を棄て、も、社會國家の爲に盡さねばならぬ事
もある。『殺身成仁。』といひ、『獻身犠牲。』といふのはこれです。
『己に克つ者は眞の豪傑なり。』
といふ西洋の格言を覚えて戴きたい。他人に勝つよりも、まづ自分のわが儘
私慾に克たなければ、眞の豪傑とはいはれない。」(一同退出)

都上り
維新前は京都
は帝國の首府
であつたので
都上りとい
ふ。

急行云々
特別急行十時
間八分。普通
急行十二時間
半。

(一)大正三年十二
月落成。

(二)武蔵國荏原郡
品川町。東京
市南方の門
戸。

(三)多摩川の末流
川崎附近の
稱。

輸出港
國內の生産物
を外國へ輸出
す港。

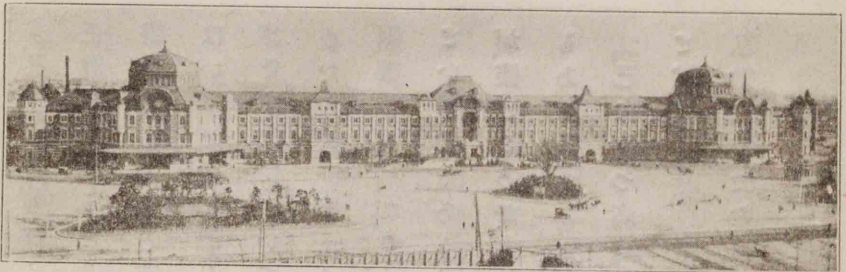
(四)共に相模國
鎌倉郡。

(五)横須賀市。三
浦半島の東
部。

(六)鎌倉郡。周
二十町。

(七)相模川の一名
甲斐國桂川の
下流。

(八)いづれも
相模國。



東 京 驛

東京から京都まで、昔ならば江戸からの都上りで十日路の長旅であつたが、今は急行の下り列車で、十時間で行ける。東洋第一の大停車場といふ東京驛を朝の九時半に出立、品川のあたりで遠く安房、上總まで見渡す東京灣の景色を眺めつゝ、やがて六郷川を渡れば、いつしか「横濱横濱」と呼ぶ神奈川縣廳のある所で、日本一の輸出港。さすがは外國人の乗降が多い。大船から鎌倉、横須賀へ行く支線があり、鎌倉からは江島へ行く電車が、ある。馬入川の鐵橋を通つて平塚、大磯此のあたり一帯の地は海水浴場として名高く、貴紳、富豪の別荘が多い。一時半で國府津に着く。昔の東海道の箱根路を通るには、こゝで汽車を乗替へねばならぬ。汽車は眞直に

二 東海道と山陽道

貴紳
身分のたつと
い方。

(一)鐵内につづ
いた甲賀伊勢
常陸まで下總
常陸の總稱で
あるが、江戸
から行く昔
の道筋をい
ふ。

(二)箱根山の山
道。昔は國府
津から小田原
道を経て、伊
豆の三島に下
つた。

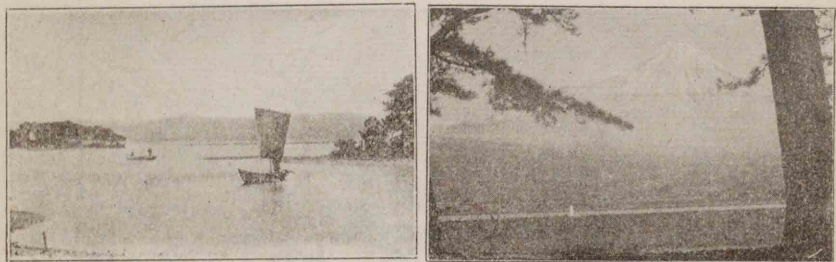
(三)共に相模
國足柄上郡。

(四)陸奥と譯す
る。山北驛か
ら駿河驛まで
七個の大驛道
がある。

(五)駿河國駿東
郡。

(六)静岡市。安
倍川に臨む。

(七)駿河國安倍
郡。山上に家



沼津から見た富士山

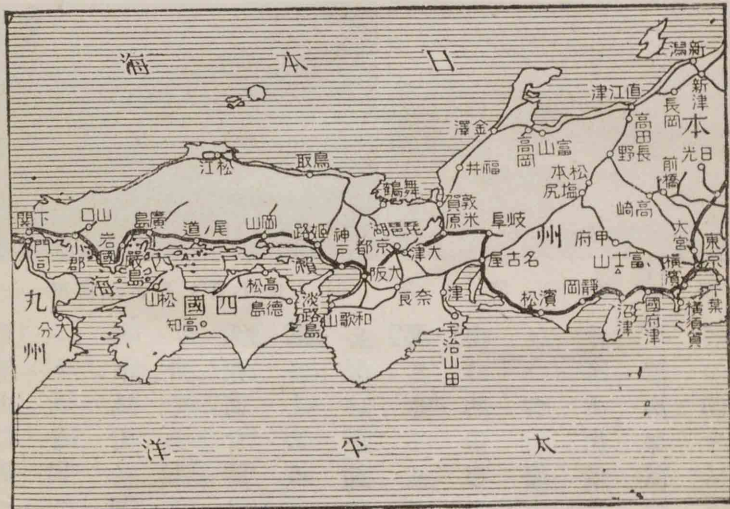
足柄山に掛つて、山北驛では前後に機關車をつける。トンネルを出ると又トンネル、溪流に架けた鐵橋をいくつともなく越えて、沼津には約十分間の停車。此のあたりの富士の眺の美しさ、雲間に抜けてた雄大崇高な姿は、日本一はおろか、世界一の名山との感を感じしめる。静岡は静岡縣廳の所在地で、徳川家には縁の深い所。初代の將軍家康はこゝで死に、最末の將軍慶喜も永らくこゝに退隱して居つた。家康を葬つた久能山は、此の市の東南二里餘にある。

(一)うつの山も、小夜の中山も、今は皆トンネルで通り抜け、富士川も、大井川も、天龍川も、悉く鐵道で樂々と渡る。天龍川を渡つた所が濱松で、濱松から間も無く昔の濱松名の湖、今は海にたいて居る。江戸時代にはこゝに關所があつたのである。

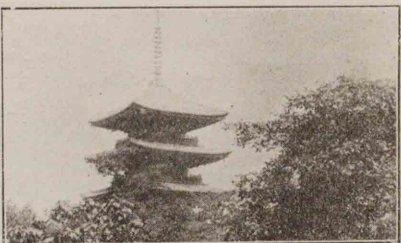
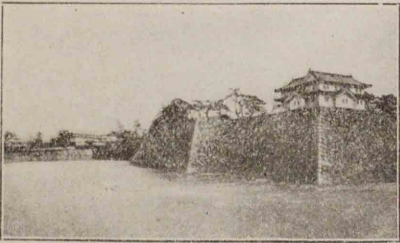
康を祀つた別
格官幣社東照
宮がある。
(二)安倍志太二
郡の境にあ
る。
(三)遠江國小笠
郡。
(四)駿河國に發
する。日本三急
流の一。
(五)甲斐國白根
山に發し駿河
灣に入る。
(六)信濃國諏訪
湖に發し遠
海に注ぐ。遠
江國にも遠
(七)江國。濱名湖
は昔は淡水湖
であつたが地
震に切れて今
の切れ目を今
切といふ。西
岸新居町にあ
つた。
(八)尾張國名古
屋市。
(九)東京と京
都。

(一)中身は椀材
で、これを金
の鱗をかぶせ
たもの。
(二)美濃國。
(三)鶺鴒といふ鳥を
使つて鮎など
を捕らせるこ
と。
(四)長五年九
月、石田三成
と徳川家康と
の戦。
(五)共に近江
國。
(六)東海道本線
と米原を分れ
敦賀、福井、金
澤、富山等を
經り、直江津に
至り、信越線
に連絡す。
(七)日本第一の
里南湖。東西
三十一丁。五
周回。北七十五
里。
(八)のやばせのふ
近くとも瀬急渡
がばまはれ瀬急
田の長橋をしそ
んじするの。

東京から僅か七時間餘で武藏、相模、伊豆、駿河、遠河、三河の六國を横斷して



名古屋(三)に着く。愛知縣廳の所在地で、兩京
及び大阪に次いで繁華な都である。汽
車の窓から華やかな日に輝く金の鯨が
見える。鐵道はこれから北へ折れて岐阜
縣に入り、間もなく岐阜(三)に着く。
岐阜はよい處金華山の麓
といふ。其の金華山の麓を流れる長良川
は、鶺鴒(三)で其の名が世界に聞えて居る。大
垣の城を眺めて關ヶ原を過ぎる時は、誰
しも三百年昔の大戦争を想ひ起すであ
らう。青葉の中に彦根城の白壁もいかめ
しく、美しい。米原(三)は北陸線の分岐點。汽車
は琵琶湖の東南方を走つて、急がばまは

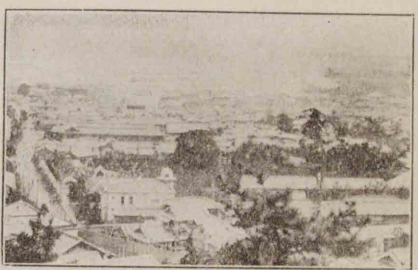
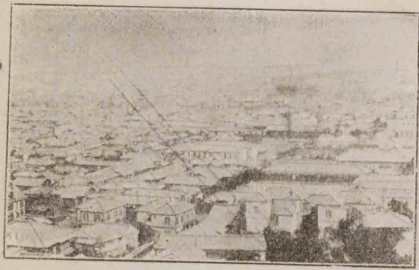


東寺の塔 大坂の城

れ。といふ瀬田の橋も左側に見える。俵藤太の射殺した
大百足(三)が七卷半巻いたといふ三上山(四)は麗しい山であ
る。大津の停車場からは琵琶湖の遠望がわけて美しい。
こゝは滋賀縣廳の在る所、間も無く、
これ(四)やこの行くも歸るも別れては
知るも知らぬも逢阪の關
と歌つた逢阪山のトンネルを越えれば京都府である。
長い日はやう／＼暮れて、東寺の五重塔が夕月の光に
照される頃、京都停車場に着く。此の行程三百二十七哩。
□
京都に滞在して、東山(四)西山(五)に名所舊蹟をあちらこち
から見物し、桃山(四)の御陵に参拜して九州へ向つた。途中大
阪では商工業の繁華な有様に驚いて、仁徳天皇の御世
をおもひ、神戸では湊川神社に参拜して、嗚呼忠臣楠子

意。
 (四〇)藤原秀郷、瀬田の橋を通り、湖のついでに琵琶湖の底に棲む龍の頼み遣ひ、その三上山の大百足を退治して、いづれは米もつくらない、依るは珍しい寶物を禮にも、からつた話がある。昔から琵琶湖の東(四一)琵琶湖の南に聳ゆる。一名近江富士。

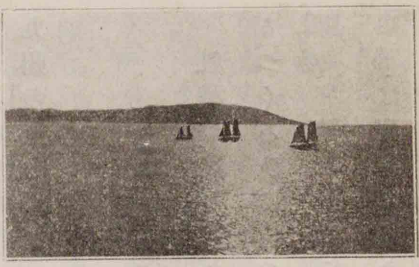
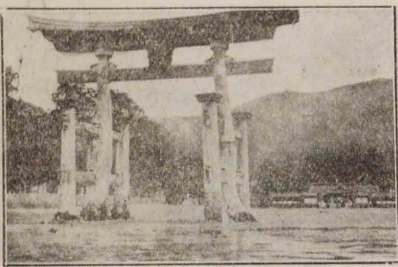
(四二)蟬丸の歌。後撰集、百人一首の意は、行か歌の地方へ、らくも地方へ、處ち出る人も、即ち知る人も、知れぬ人も、處ち行く人も、名のある所、以てあらう。



戸 神

之墓を拜んだ。
 神戸からの鐵道は山陽線で、海岸に沿うて奔る所が多いので、風景のよい事は、この線路も及ぶまいと思はれる。神戸驛を離れると、舞子から明石の浦々、淡路島は目の前に近く、幾十百の白帆が静かな波の上に浮んで居る。淡路島通ふ千鳥の歌つたり、ほのく、と明石の浦の歌つたりした風情も、自らしのばれる。
 姫路の城は近頃立派に修繕されて、此の道中の一美観である。眞白な城で、昔から鷲城といふ名があつたさうである。四十七士の故郷赤穂は、那波といふ驛の南三里にある。
 岡山縣廳の所在地岡山の後樂園は、泉石の美を以て聞えて居る。尾道あたりで、再び瀬戸内海が見えて、右は山、左は海、どちらを見ても美しい景色である。鹽田とい

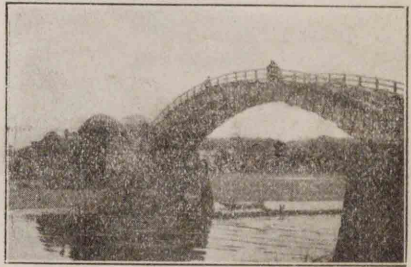
(四三)眞言宗東寺、京都の總本山。京都市下京區にある。桓武天皇十五年、桓武天皇の創建。
 (四四)京都市の東方に連つて居る。三十三ヶ所と稱する。
 (四五)京都市の西方に連つて居る山。
 (四六)明治天皇及び昭憲皇太后の御陵。山城町の東。
 (四七)仁徳天皇御即位の年、都を大坂に定め、高津宮において、津宮において、別格官幣社。楠木正成を祀る。神戶車場の西約一町。
 (四九)神戸から下關まで。
 (五〇)須磨と明石の間。



島 嚴 望遠の島路淡

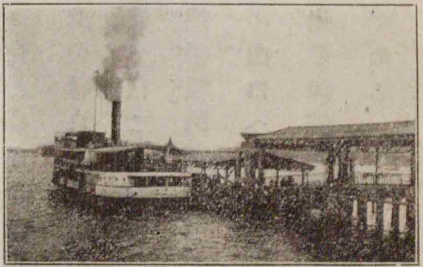
ふものも、此の旅で始めて見た。こゝらの驛々で吉備團子を賣つて居るが、これは昔の國の名に因んだので、桃太郎の生國といふ譯で附けたのでは無い。岡山縣から廣島縣へかけては、壘表の産地で、花筵の産出も夥しい。
 廣島は中國第一の都會で、縣廳の所在地。日清戦争の時、明治天皇は茲に大本營を置かせられたのであつた。近くに宇品、吳など軍事上大切な港がある。間も無く又も瀬戸内海が現れて、日本三景の一たる嚴島を汽車の窓から眺めた。海の中の大鳥居も、其の後に列る社殿も、夢のやうに浮んで、話に聞く屋氣樓とはこんなものかと思つた。岩國といふ處は有名な錦帯橋のある所。こゝはもう山口縣で、山口縣廳所在地の山口へは、小郡驛から支線で行くのである。下關は本州の西端、内海の入口で、安徳天皇を祀り奉つた赤間宮がある。

(五) 明石市。
 (五) 兵庫縣に屬する。東四十七里三十五町。北三十五町。南二十六町。五里。
 (五) 淡路島通ふ千鳥のなく聲に、須磨の集守(金葉)平兼昌。
 (五) 明石の浦の朝霧に、島がくれば、船をしぞ思ふ。
 (五) 古今集、讀人不知。但し、小野篁の詠。
 (五) 豊臣秀吉の酒井氏の居城であつた。
 (五) 元祿十四年三月、赤穂の城主野長矩が、吉良上野介の爲に、城地を取上り、長矩の十七人が、義典の戦で、死した。



九州の土を踏むのである。

神戸を出ると(七)の谷の古戦場錦があり、こゝに着いて平家一門の亡びた壇の浦を見るのは、歴史の上を旅して居るやうな心地がする。下關の向岸は九州の門司で、此間の海峡を關門海峡といふ。關門連絡船に乗れば、僅か十五分で



船 絡 連 門 關

三 兎 狩

德(七) 富 蘆 花

收穫が済む。霜が降る。裏山の楓が染まる。すると兎狩の季節がそろそろ始まる。つくろひに遣つてあつた網も出来て来る。何日は兎狩といふ貼札が出る。脚絆草鞋の用意に忙しくて、僕等は何も手に着かない。愈々其の日になつた。炊事番は夜半に起きて握飯を拵へる。皆支度して塾の庭に勢揃する頃は、午前

を討つて主君の讐を報じたの(七)いふ。
 (五) 播磨國赤穂郡。
 泉石
 (五) 尾道市。備置きぐあひ。
 (五) 山陽道及び畿内と四國九州の間にある海州。
 鹽田
 海邊の低地に海水を入れて、鹽を採取する所。しほはまともいふ。
 (六) 備前、備中、備後は昔は吉備の國と總稱した。
 (六) 安藝國。
 (六) 山陽道と山陰道の總稱。大木營。
 戦時大元帥(天皇)のいらせられる本營。
 (六) 廣島市の南端。
 (六) 吳市。安藝

三時過でもあらう。月が白く冴えて居る。三たび関の聲を揚げて、月影を踏んで出かける。大人組は網をかついで、高らかに詩を吟じて行く。僕等は黙つて、併し心は得々としてついで行く。

ねむさうな雞の聲のする村も過ぎ、けたましく犬の吠えかゝる村も過ぎ、野路を通り、谷川を越え、もう一里半も来たらう。月が落ちて、野は一面の曉闇前に行く者の姿もはつきりとは見えぬ。ふとすばらしい大きな眞黒なものが鼻の先に現れる。山だ。目的の山だ。まだ早い。皆焚火をしながら天明を待つて居る。

僕は藁の上に寝ころんで居ると、背は寒い、顔や腹は焚火に暖つて、炎々と立昇る燐の間に、ちら／＼見えて居た一同の赤い顔が次第に遠くなつて、ついでうつとりと一寝入したと思へば、起される。眼を摩つて起上ると、なるほど天明だ。東が白んで、曉の風が切るやうに面を吹く。焚火の跡だけ黒い圓を描いて、四邊は一面の霜だ。やがて勢揃して山にかゝる。進軍の號令がかゝる。関の聲が一時に揚る。二山も追ふ頃は、もう朝日が晃々と秋の空に昇つて居

國。軍港。
 (五) 廣島灣の西
 南にある島。
 東西三十町南
 北二里半。
 夢のやうに
 浮ぶ。
 霞が霧の中に
 ぼんやり浮い
 て見える。
 屋氣樓
 の地上に在るも
 のが空中に見
 える現象。越
 中の海岸など
 によく現れ
 る。
 (六) 周防國玖珂
 郡岩國町。
 (七) 岩國町の錦
 川にかゝつて
 居る橋。長さ
 百二十五間。
 一名算盤橋。
 (八) 周防國吉敷
 郡山口町。
 (九) 吉敷郡。山
 口町の南三
 里。
 (十) 市。長門國。
 馬關又赤間關
 ともいふ。
 (七) 官幣中社。
 (七) 元暦元年平
 氏が源頼朝

今懐うても愉快だ。秋が黄に、紅に、紫に、鶯に、あらゆる彩色の限りを盡した木を押分け、葉を打拂ひ、聲を揚げて登る心地。網近くまで追ひつめて、如何かと思つて居るとき、何處からか「それだ」といふ聲がして、吾知らず棒を振つて勝鬨をあげる心地。網番をして、攻寄せる勢子の叫の間近になるのに、兎のうの字も駈けて來ず、あゝだめと落膽するとき、突然がさ／＼と音をさせて、覗く鼻先へ飛込んで、二つ三つ網ながらにとんぼがへる兎を、樹蔭から飛びかかつて押へる心地。落葉かき分けて、谷川の水を口づけに飲んで、木の根草の上で脚投出して、握飯にかぶりつく心地。食つてしまつて、落葉の床に仰向に寝て、碧玉よりも澄んだ空を眺めて、汗ばんだ顔を冷々した風に吹かせる心地。數へ立てると際限も無い。

秋の日の短さ、まだ三匹しか取れぬにも、もう鴉が鴉き出した。遙かに見える湖や川は金の如く夕日に閃いて居る。獲物は蕪葛で四脚を縛つて、大人組が昇いで疾くに還つた。僕等は紅葉の枝を折つて、ぶら／＼後から還つて行く。

義經に攻められた大敗した處。
 (七) 下關市の東方海中。壽永四年平氏こゝで滅びた。
 (七) 市。九州の最北端。
 (七) 五名は健次郎。熊本の入。徳富蘇峯の弟。小説と小品の名著が多い。勢子。鳥獸を追い出す人。
 (七) 名は忠教。徳川氏初世の將軍の前で鶴の吸物を賜はつた時、餘り菜が多かつたので、翌日多くの青菜を献上して、鶴を刺した。
 (七) 蘆花作の小説。明治三十六年東京民友社發行。
 仕事師。土木などに従

山を下りて野に出ると、日は彼方の森に沈んで、夕煙が村々に立昇ると思ふと、薄紫に煙る野末に大きな月が顔を出す。其の月がやゝ高く、やゝ小さくなつて、打連れて歩み行く影の大分短くなる頃には、僕等はもう塾に歸り着いた。草鞋をぬいで顔を洗つて、先生始め一同大胡坐で、てんでに兎汗を盛つて飯を食ふ。大久保彦左の鶴の吸物ではないが、此の兎は別名を大根、胡蘿蔔、牛蒡、焼豆腐、蕪葛といふのではあるまいかと思ふ程、正味は少い。併し其の味、否それよりも食つてしまつて、着物も更へすぐつすり寝る時の心地は、何ともいへない。夢も見ない。身うごきもしない。翌朝の九時頃までは死骸も同然だ。

(七) 思出の記

四 休暇日記

十二月二十五日。晴。今日より休暇となりて、身體伸々す。冬の日影、ほかほかと暖に、山茶花の花二三輪、障子に映れり。昨日までの學校の忙しさを想へば、夢の如し。仕事師門松を立つ。門に出でて見る。例年よりも大なり。隣家山田

年配 天皇のお出し
勅題としごころ。
になる歌の
題。毎年十一
月頃お出し
になり、一般
國民をして、其
進せしめ、其
の中の数首を
選んで一月に
御發表になる
定めてある。
博士。文藝家。文學
博士。姫路の
人。東京帝國
大學教授。
見聞す 見たり聞いた
りする。
觀察力 ミの事を注意
して觀察する
力。
周密 よく行きと
いて、ぬけめ
のないこと。
陰晴 くもりとか
はれとかいふ
だけを記す。

三日。 四日。 五日。 風邪の氣味なれば、引籠りて新年の雜誌を讀む。
六日。 晴、朝近藤君、中村君來る。連立ちて今井先生を訪ふ。先生歡んで迎へられ、休暇中、何か面白い事があつたかね。と問はる。予まづ、何もありませんでした。と答へけるに、君等の年配の時分は、正月が面白いものだが、といはる。それより、こんな歌を詠んだ。と示さる。を見れば、勅題「新年雪」を詠せられたるなり。夫人の御手料理を戴き、夕刻辭して歸る。
七日。 晴、休暇も今日限りなり。何となく心淋し。夕、門毎の松取除かる。風寒し。

— 日記文範 —

五 日記の七徳

三 上 參 次

予夙に思へらく、日記を記すには七つの徳ありと。蓋し、一身一家の事、世上の事、日常思ひもし、感じもし、又見聞し、經歷せる所を記すが故に、知らず識らず日記をつくる人をして、觀察力を鋭敏ならしめ、周密ならしむること、其の一なり。初の程は日記をつくるに、懶く、或は日を記し、陰晴を記して、其の下を

空白 何も書かずに
白くしておくこと。
うらつづけに。
むきだしに。
あからさま
に。露骨に。
心の置かれ
ぬ。
へだてのな
い。
回顧 過去をふりか
へつて見るこ
と。
更にも言は
ず いふまでもな
い。
匹夫 身分もない普
通の男。
何れか云々
どれかとして
世歴史の材料
とならないも
のはない。
(一)文學士。小説
家。東京の人。

空白にすることなど多けれど、次第に慣るゝに隨ひて、また其の煩はしきを覺えず。其の間に自ら忍耐力の養はれたるを感せしむること、其の二なり。日の記事を下へたる後、これに向へば、或は羞ぢ、或は悔い、恰も明鏡に向ひたらんが如く、我が身を省るのたよること多し。此の修養上の利益、其の三なり。思ふ事言はざれば腹ふくるゝは人の常なり。さりとして喜怒哀樂、うちつけに他人に分つべきにもあらず。かゝる場合に日記を記す時は、日記こそ心の置かれぬ無二の友なれど喜ばるゝ事多し。これ其の四なり。老いたる後の回顧の料となること、其の五なり。筆まめとなること、其の六なり。而して王公大人の記録は更にも言はず。匹夫の日記なりとも、何れか後の世の歴史家の好材料たらざるべき。これ其の七なりとす。
予は常に此の七徳を擧げて子弟に教へ、日記を記す習慣を養はしむ。

六 蜘蛛の糸

(一) 芥川龍之介

或日の事でございます。お釋迦様は極樂の蓮池の縁を、獨りであらう歩きになつていらつしやいました。池の中に咲いてゐる蓮の花は、みんな玉のやうに眞白で、其の眞中にある金色の葉からは、何とも言へない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居りました。

極樂はちやうど朝でございました。

やがてお釋迦様はその池の縁にお佇みになつて、水の面を蔽つてゐる蓮の間から、ふと下の様子を御覽になりました。この極樂の蓮池の下は、ちやうど地獄の底に當つて居りますから、水晶のやうな水を透徹して、三途の河や針の山の景色が、まるで視眼鏡を見るやうには、つきりと見えるのでございます。

すると、その地獄の底に韃陀多といふ男が一人、外の罪人と一緒に蠢いてゐる姿が、お眼に止りました。この韃陀多といふ男は、人を殺したり、家に火をつけたり、いろ／＼悪事を働いた大ごろばうでございませうが、それでもたつた一つ善い事をした覚えがございませう。と申しますのは、或時この男が深い

(一) 地獄へ赴く途に在るといふ。瀧川、また三つ瀬川、渡河などともいふ。
(二) 地獄に在る。前惡業を行つた者この山に追上げられるといふ。
蠢く、蠢などの動くやうに、うよする。

林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這つて行くのが見えまして、そこで韃陀多は早速足を舉げて、踏殺さうと致しましたが、いや、これも小さいながら、命のあるものだ。その命を無暗にとるといふ事は、いくら何でもかはいさうだ、と、かう急に思ひ返して、どう／＼その蜘蛛を殺さずに、助けてやりました。

お釋迦様は地獄の様子を御覽になりながら、この韃陀多には蜘蛛を助けた事があるのをお思ひ出しになりました。さうして、それだけの善い事をした報には、出来るならこの男を地獄から救ひ出してやらうとお考へになりました。幸ひ側を御覽になりますと、翡翠のやうな色をした蓮の葉の上に、極樂の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけて居りました。お釋迦様はその蜘蛛の糸をそつとお手にお取りになりました。さうして、それを玉のやうな白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へまつすぐにおおろしなさいました。

二

こちらは地獄の底の血の池で、外の罪人と一緒に浮いたり沈んだりして

ゐる毘陀多でございます。何しろ、ごちらを見て、真暗で、たまにその暗闇からぼんやり浮上つてゐるものがあると思ひますと、それは恐ろしい針の山の針が光るのでございますから、その心細さと言つたらございません。その上あたりは墓の中のやうにしんと静まり返つてゐて、たまに聞えるものと言つては、たゞ罪人がつく微かな溜息ばかりでございます。

これは、こゝへ落ちて来る程の人間は、もうさまざまな地獄の責苦に疲れはて、泣聲を出す力さへなくなつてゐるのでございました。ですから、さが大どろぼうの毘陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかゝつた蛙のやうに、唯もがいてばかり居りました。

ところが或時の事でございます。何氣なく毘陀多が頭を舉げて、血の池の空を眺めますと、そのひつそりとした闇の中を、遠い遠い天の上から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかゝるのを恐れるやうに、一すぢ細く光りながら、する／＼と自分の上へ垂れて參るではございませんか。毘陀多はこれを見ると、思はず手を打つて喜びました。この糸に縋りついて、どこまでものぼつ

て行けば、きつと地獄からぬけ出せるのに相違ございません。いや、うまく行くと、極樂へはいる事さへも出来ませう。さうすれば、針の山へ追上げられることもなくなれば、血の池に沈められることもある筈はございません。かう思ひましたから、毘陀多は、早速その蜘蛛の糸を両手でしつかりと掴みながら、一所懸命に上へ上へと、たぐりのぼり始めました。元より大どろぼうのことでございますから、かういふ事には、昔から慣れきつてゐるのでございます。

併し地獄と極樂との間は、何萬里となく隔つてゐるものですから、いくら焦つて見た所で、容易に上へは出られません。稍暫くのぼる中に、どう／＼毘陀多もくたびれて、もう一たぐりも上の方へは、のぼれなくなつてしまひました。そこで、仕方がございませんから、まづ一休み休むつもりで、糸の中途にぶら下りながら、遙かに目の下を見下しました。すると、一所懸命にのぼつたかひがあつて、さつきまで自分がゐた血の池は、今ではもういつの間にか、闇の底にかくれて居りました。それから、あのぼんやり光つてゐた恐ろしい針

の山も、足の下になつてしまひました。この分でのぼつて行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけがないかも知れません。

韃陀多は両手を蜘蛛の糸にからみながら、こゝへ來てから何年にも出した事のない聲で、しめたしめた。と笑ひました。ところが、ふと氣がつかますと、蜘蛛の糸の下の方には、數限りもない罪人たちが、自分ののぼつた後を附けて、まるで蟻の行列のやうに、やはり上へ上へと一心に攀ちのぼつて來るでございませぬか。韃陀多はこれを見ると、驚いたのと恐ろしいのとで、暫くは唯ばかのやうに大きな口を開いた儘、眼ばかり動かして居りました。

自分一人でさへ斷れさうなこの細い蜘蛛の糸が、さうしてあれだけの人數の重みに堪へることが出來ませう。萬一途中で斷れたといたしましたら、せつかくこゝまでのぼつて來たこの肝腎な自分までも、もとの地獄へ逆落しに落ちてしまはなければなりません。そんなことがあつたら、大變でございませぬ。

が、さういふ中にも、罪人達は何百となく、何千となく、眞暗な血の池の底か

らうよ／＼と這上つて、細く光つてゐる蜘蛛の糸を、一列になりながら、せつせと登つて參ります。今の中にどうかしなければ、糸は眞中から斷れて落ちてしまふに違ひありません。そこで韃陀多は大きな聲を出して、

「こら罪人ども、この蜘蛛の糸はおれのものだぞ。お前達は一體誰の許しを受けて登つて來た。下りろ。」と喚きました。

その途端でございませぬ。今まで何ともなかつた蜘蛛の糸が、急に韃陀多のぶら下つてゐる所から、ぶつりと音を立て、斷れました。ですから韃陀多もたまりませぬ。あつといふ間もなく、風を切つて、獨樂のやうにくる／＼まはりながら、見る／＼中に闇の底へ、眞逆様に落ちてしまひました。後には唯、極樂の蜘蛛の糸が、きら／＼と細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れてゐるばかりでございませぬ。

三

お釋迦様は極樂の蓮池の縁に立つて、この一部始終を、じつと見ていらつしやいましたが、やがて韃陀多が血の池の底へ石のやうに沈んでしまひま

一部始終
始から終まで
のこらず。

すと、悲しさうなお顔をなさりながら、又ぶら／＼お歩きになり始めました。自分ばかり地獄からぬけ出さうとする毘陀多の無慈悲な心が、さうしてその心相當な罰を受けて、もとの地獄へ落ちてしまつたのが、お釋迦様のお目から見ると、あさましく思し召されたのでございませう。併し極樂の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着致しません。その玉のやうな白い花は、お釋迦様のおみ足のまはりに、ゆらくと夢を動かして居ります。そのたんびに、真中にある金色の薬からは、何ともいへない佳い匂が、絶間なくあたりに溢れ出ます。

極樂ももうおひるに近くなりました。

— 傀 儡 師 —

三訂帝國讀本卷二終

通用字及び正字對照表

(茲に其の主なるもののみを擧ぐ。本書には主として通用字を用ひたり。)

劔	剪	刃	函	滅	涼	準	况	决	冒	兔	免	佞	伊	兩	通用正		
劍	剪	刃	函	滅	涼	準	况	決	冒	兔	免	佞	伊	兩	通用正		
冤	墻	塚	塲	噴	器	唇	叙	収	厨	厨	卿	鄉	即	効	通用正		
冤	牆	塚	塲	噴	器	唇	叙	収	厨	厨	卿	鄉	即	効	通用正		
拔	拿	戲	懺	懺	懺	恒	往	稟	屏	并	帽	尅	寶	寇	通用正		
拔	拏	戲	懺	懺	懺	恆	往	稟	屏	并	帽	剋	寶	寇	通用正		
濱	温	冰	殲	欸	概	桿	晋	昂	既	整	攜	攢	擯	插	通用正		
濱	溫	冰	殲	欸	概	杆	晉	昂	既	整	攜	攢	擯	插	通用正		
盃	鼓	痴	畧	留	畫	瑣	玄	貓	猪	猿	熔	陰	潜	濶	通用正		
杯	鼓	癡	略	畱	畫	瑣	玄	貓	猪	猿	鎔	陰	潛	闊	通用正		
續	續	紀	穀	粘	籤	纂	節	笄	竊	秘	頤	穎	稟	研	通用正		
續	續	紀	穀	黏	籤	纂	節	笄	竊	祕	頤	穎	稟	研	通用正		
厠	勅	冲	恸	俟	京	亡	並	万		聿	耻	羹	群	罰	經	織	通用正
廁	敕	沖	恸	埃	京	亾	並	萬		聿	恥	羹	羣	罰	經	織	通用正
婚	姊	妍	妊	野	坂	囁	叶	厮	同	艷	館	鋪	阜	致	腸	脈	通用正
婚	姊	妍	妊	埜	阪	囁	協	厮	字	艷	館	鋪	阜	致	腸	脈	通用正
考	慙	富	忘	庵	嶋	峯	峩	岳	表	解	霸	褻	衛	蔭	萌	莽	通用正
攷	慙	富	忘	菴	島	峰	岷	嶽	表	解	霸	褻	衛	蔭	萌	莽	通用正
概	槁	楫	棕	基	案	柿	村	普	表	賈	贊	賓	象	讎	讖	記	通用正
槩	槁	楫	棕	基	案	柿	村	普	表	賈	贊	賓	象	讎	讖	記	通用正
砧	睹	狸	貉	無	烟	汗	毘	朴	表	隸	隙	間	鎖	隣	輒	軟	通用正
砧	睹	狸	貉	无	煙	汚	毗	樸	表	隸	隙	間	鎖	鄰	輒	軟	通用正
緜	總	網	紆	糾	粽	筍	競	稿	表					爵	鬪	馱	通用正
緜	總	網	紆	糾	糉	筍	競	藁	表					爵	鬪	馱	通用正

附録

卻シキヤク ロ、ハ、隣。
 シリゾク。「退卻」
 鍛カダシ キタフ。「鍛錬」
 鍛カダシ シコロ、「鑪」

宛字 (左の如き字は假名を
使用するをよしとす)

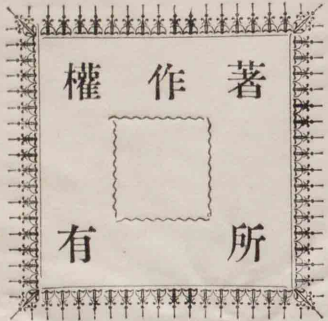
おぼつかなし 覺束なし
 かひ(詮の意の場合) 甲斐
 きつと 屹度
 さすが 流石、遺
 しまふ 仕舞ふ
 せつかく 折角
 だけ 丈
 だめ 駄目
 ちやうど 丁度
 ちよつと 一寸、鳥渡

附 録 終

でたらめ 出鱈目
 とうく 到頭
 とかく 兎角、左右
 とて、とても 迎
 とにかく 兎に角
 なかく 中々、却々
 ふるまひ 振舞
 はかなし 果敢なし
 ほんたう 本當
 むだ 無駄
 むづかし 六ヶし
 やたら 矢鱈
 やはり 矢張

大正十一年一月十四日三訂五版發行
 大正十一年一月十四日三訂五版發行
 大正十一年一月十四日三訂五版發行
 大正十一年一月十四日三訂五版發行
 大正十一年一月十四日三訂五版發行
 大正十一年一月十四日三訂五版發行
 大正十一年一月十四日三訂五版發行
 大正十一年一月十四日三訂五版發行

定價	三訂帝國讀本
卷一、三、四、各金四十五錢	大正十一年一月十四日三訂五版發行
卷二、五、六、各金四十七錢	大正十一年一月十四日三訂五版發行
卷七、八、各金三十七錢	大正十一年一月十四日三訂五版發行
卷九、十、各金三十六錢	大正十一年一月十四日三訂五版發行
臨時定價	大正十一年一月十四日三訂五版發行
卷一、三、四、各金七十七錢	大正十一年一月十四日三訂五版發行
卷二、五、六、各金六十八錢	大正十一年一月十四日三訂五版發行
卷七、八、各金六十三錢	大正十一年一月十四日三訂五版發行
卷九、十、各金六十一錢	大正十一年一月十四日三訂五版發行



發 行 所

東京市神田區
通神保町九番地

合資
會社

富山房

長電話神田三〇一四・三七六〇番
振替口座東京五〇一番

著 者 芳 賀

東京市神田區通神保町九番地

合資
會社 富山房



發 行 者 兼
印 刷 者

合資會社富山房社長

代 表 者

坂本嘉治馬

東京市京橋區木挽町二丁目十三番地

印 刷 所

合資會社 新 堂

